

えわはせん。この只今の入道殿下の御有様  
をも申しあげばやとおもひしに、あはれ  
に嬉しくも逢ひ申したるかな。今ぞ心安く  
よみまらるべき。思しき事はわは、  
實にぞ腹ふくる心地しける。かゝれば、  
そ、むかしの人は物はまほしくなれば、  
穴を掘りてはいひれ侍りけめとおぼえ侍  
る。返すく嬉しく對面したるかな。さて  
もいくつにかなり給ひぬるといへば、今一  
人の翁、いくつといふことも更に覺え侍ら  
ず。たゞしおのれは、故太政大臣貞信公  
の、藏人の少將と申し、折の、小舎人わら  
は大夫丸ぞかし。わしはその御時の母后の  
宮の御方のめしつかひ、かう名の大家の世  
繼とぞいひ侍りしかな。さればわしのみ  
としは、おのれにはこよなく勝り奉らんか  
し。みづからは小童にてありし時、わしは  
廿五六ばかりの男にてこそはいませしかと  
いふれば、世繼、しかくさ侍りしこと  
なり。さてわしの御名はいかにぞやとい  
ふれば、故太政大臣殿にて、元服仕うま  
つりし時、きむぢが姓は何ぞと仰せられし  
かば、夏山となん申すと申し、を、やがて  
繁樹となんつけさせ給へりしなどいふに、

いとあましくなりぬ。誰も少しよろしき  
ものどもは、見おこせぬよりなどしけり。  
年二十ばかりなる生侍めきたるもの、切  
に近く寄りて、いでいと興ある事いふ老若  
たちよな。更にこそ信ぜられぬといへば、  
翁二人見かはしてあざわらふ。繁樹となつ  
るが、かたさまに見やりて、わしはいくつ  
といふ事覺えずといふめり。この翁どもは  
覺え給ふやと問へば、更にあらす、一百  
五十歳にぞ今年はなり侍りぬる。されば繁  
樹は百四十には及びてさぶらふらめと、や  
さしく申すなり。(爲業)

や。今もし蓬萊の店をさがさん、不老の  
薬はうり切れたり、不死の薬ばかりありと  
いはよ、たとへ一錢に十袋うるとも、不老  
をはなれて何かせん。不死はなくとも不老  
あらば、十日なりとも足りぬべし。神仙不  
死何事かなす、たゞ秋風に向つて感慨多  
からむと、藟子訓をそしりしもさる事ぞか  
し。ねがはくは人はよきほどのしまひあら  
ばや。兼好がいひし、四十たらずの物ずき  
はなべてのうへには早過ぎたり。かの稀な  
りといひし、七十まではいかどあるべき。  
(也有)

の縁かな。通ひなれたる老の坂、行く事や  
すき心かな。故人眠り早く覺めて、夢は六  
十の花に過ぎ、心は茅店の月に嘯き、身は  
板橋の霜に深ひ、白頭の雲は積れども、老  
を養ふ瀧川の、水や心を清むらん。奥山の  
深谷の下のためしかや、流れを汲むとよし  
絶えじ。長世の家にこそ、老せぬ門はある  
なるに、是も年ふる山住の、千世のためし  
な松陰の、岩井の水は濁にて、老を延べたる  
心こそ、猶行末も久しけれ。(謡曲、養老)

●腰は揉めど氣は張弓、出仕に忘り梨子打  
烏帽子引きしめ、大紋の袖若々と、心は二  
十歳は七十、古來稀なる聖親父、何れも御  
太儀、七つの時計を打ち申したが、殿はい  
まだお下りないか。ヤアゑいと座に就くは  
乾平馬、平郡半人、御老人の御勤め御苦  
勞、餘寒も強しと、火鉢愛相に差寄りれば、  
イヤ〜、いや御無用、極寒の内でも  
此年まで、煩悩の味も存ぞ祖父め、火の  
嫌ひな証據、脊にちりげの跡もおりない。  
十四の時から御前を勤めて五十七年、今日  
の唯今迄くま一つ致さず。今でも未だ八  
分の弓を彎き申す。口の怖い荒馬でも、一  
貴でも乗伏せて線にす。(淨瑠璃、浦島年代記)

なら風のこゝろやうにと、何かな表へ當り眼、  
門の戸びつしやりさしとぐさ、燃ゆる思は  
娘氣の細き線香に立つ煙。(淨瑠璃、歌祭文)

●歩みを進び年月を、送り迎へて老が身  
の、風に起き、夜中に寢覺め仕へてぞ、な  
がらへ來ぬる春秋の、月に馴れ花に添ふ、  
心も老と身はなりて、まこと致す志、實  
に神感も頼もしや。(謡曲、源大夫)

●どうぢの蛤は出来たであらう。扱祝言の  
事邊がきいて、きつい悦ぢやが、年は寄る  
まいもの、先刻のやつさもつまで取り上し  
たか頭痛もする。いかう肩がつかへてき  
た。い、檀の敷は争はれぬものぢやないの。  
左様ならばそろく、私かもんで上げませう  
か。ソリや久松かたじけない。老いては子  
に随へぢや。孝行にかたみ怨のない様に、  
おみつと三里をすてくれ。アイ〜そん

●いやましにひたひの波はかゝれども消え  
ずも年のゆき積る哉。(願仲)

●朝な〜見れどもわしかのかけならで日に  
そふ老のます鏡哉。(忠房)

●翁さび立居もやすくせられればつら杖つ  
きて今日もくらしつ。(兼昌)

●年月のゆきつもるにも黒髪のかはるすが  
たのはづかしき哉。(常澄)

●くるかみもつひにかはりぬ霜と見え雲と  
まがひし月のつもりに。(長流)

●在りて世にうきめは見じと散る花をうら  
やむ斗り身は老いにけり。(枝直)

●おろかにてかよはきものゝ老いたればと  
りどろろなきわが身なりけり。(藤庵)

●いたづらにおいはてんとはおもひきや心  
のしこそたのみがたけれ。(同)

●今はたゞむかふもやまし年をへておもがは  
りせぬ月と花とに。(千隆)

●くちなしのいはね思やみな人の老いては  
髪のいろもいづらむ。(契沖)

●ともしればわかきながかにいとほれてお  
きなまびたる身ないかせん。(春海)  
●苗代に老のちからや尻だすき。(風雲)  
●笑はれに行かばや花に老の穢。(杉風)  
●鼠短かし夜ながし老の物狂。(支考)  
●老いにけり耳に夢たのむ時鳥。(越人)  
●何は此末摘花を老の伊達。(支考)  
●かやり火や蚊屋つる方に老獨。(其角)  
●名月も老いにけらしなみ池。(許六)  
●老の身はなづな府にも劣りけり。(乙二)  
●便なげに出代る老の荷物かな。(之房)  
●くちをしや身は老といふくせものに頭を  
さげつ腰なかやめつ。(橋洲)  
●ちかづきになるもかよみのおしてふせま  
らぬ翁にこしをかよめて。(山陽)  
●老らくの身にはむかしをしのぶすり伊達  
はかみ子の袖ばかりにて。(爲成)  
●年つもる頭は雪のまら山や腰もふたへに  
かよの名どころ。(粟人)  
●何をして身るときはせんきれものときは  
めがたなの翁さびては。(米人)  
●思ひ出づるよめりの時の丸編も今はしら  
かの雪とふる礎々。(定庵)  
●老の身は浮世に事なかく筆のさきの短く

なるぞかなしき。(江戸住)  
●水のたる男ざかりもあきしをかほる淵  
瀬や老のみづばな。(走帆)  
●登りこし老の坂路はいかにしてあと戻り  
せん道はなくと。(清澤園)  
●今はたよわすれかちになりにけるとる  
年數もおぼえかねつ。(素庵)  
●年よりがよると咄に砂がふり。(川柳)  
●まだ生きて居るかともむい尋ねやう。(同)  
●安隠居どぶをさらふを役目にし。(同)  
●夜櫻は年寄のみるものでなし。(同)  
●耳に目をぶらさげ親父鼻をかみ。(同)  
●新道に昔ばなしのねをおされ。(同)  
●帆柱のてうちんになる残念さ。(同)  
●年よりの鼻は目がねのかよみたて。(同)  
●来年を若にする無筆八十七。(同)  
●御隠居をあま口に見てめしにつき。(同)  
●餅ちよみを着たのが隠居目にとまり。(同)  
●光いんは隠居のうへにとよこほり。(同)

●世にひくき山下水のほそくと。ながれ  
ゆくへを川竹の、ふかきめがみのあいそし  
こそも、今はつきなしたよりの杖に、のぼ  
りくし、老の坂、かすも六十にあまりて  
一つ、二重の腰のかすはづかし、なして  
名残をのこして末の、千代の古道たづね見  
ん。(俗語)  
●老人の冷水。(俚語)  
●老人の子は影なし。(同)  
●老後のおもひ出。(同)  
●老いたるは父とせよ。(同)  
●老いては子に従へ。(同)  
●老いて再稚兒となる。(同)  
●洛陽城東桃李花。飛來飛去落誰家。洛  
陽女兒惜顏色。行逢落花長歎息。今年花  
落顏色改。明年花開復誰在。已見松柏摧爲  
薪。更聞桑田變成海。古人無復洛城東。  
今人還對落花風。年年歲歲花相似。歲々  
人不同。寄言全盛紅顏子。應憐半死  
白頭翁。此翁真可憐。伊昔紅顏少年。公  
子王孫芳樹下。清歌妙舞落花前。光祿池  
開錦繡。將軍樓閣盡神仙。一朝臥病無  
相識。三春行樂在誰邊。宛轉蛾眉能幾時。  
須臾鶴髮亂如絲。但看古來歌舞地。惟有

●黃竹鳥雀愁。(劉廷之)  
●憶我少壯時。氣樂自忻豫。猛志逸四海。  
奮袖思遠遊。往者歲月頹。此心稍已去。  
直欲無復娛。每々多憂慮。氣力漸衰損。  
轉覺日不如。願舟無須曳。引我不復得  
住。前途當幾許。未知止泊處。古人惜寸  
陰。念此使人懼。(陶潛)  
●長與照青鏡。形影兩寂寞。少年辭我去。  
白髮隨梳落。萬化成於漸。漸衰看不  
覺。但恐鏡中顏。今朝老於昨。人生少滿  
百。不得長歡樂。誰謂天地心。千齡與龜  
鶴。吾聞善醫者。今古稱扁鵲。萬病皆可  
治。唯無治老藥。(白居易)  
●白髮隨節隨。未幾思厚衣。四支易懈  
倦。行步益踈遲。常恐時歲盡。魂魄忽高飛。  
自知百年後。當上生旅棊。(阮瞻)  
●宿昔背雲志。蹉跎白髮年。誰知明鏡裏。  
形影自相憐。(張九齡)  
●氣力漸衰損。髮髮終以暗。昔爲春月華。  
今爲秋口草。(張載)  
●軟頭收紅蕊。元髮吐素華。遊丹將老。  
咄々奈老何。(鮑照)  
●紅榮黃落。一樹之春色秋聲。結綬抽簪。  
一身之壯心老思。(晉三品)

●昔爲京洛聲華客。今作江湖潦倒翁。  
〔らうばい〕 狼狽。 驚駭。 喪心。 惶急。  
慌忙。 遽然。  
あわてふためく。 あたりまどふ。  
●其夜の夜半ばかり、富士の沼にいらし  
りける水鳥どもが、何かは驚きたりけん、  
一度にはつと立ちける羽音の、雷大風など  
のやうに聞えければ、平家の兵共、あはや  
源氏の太勢の向ひたるは、昨日齋藤別當が  
申しつるやうに、甲斐信濃の源氏等富士の  
裾より搦手へや廻り候ふらん。敵何十萬騎  
かあるらん。取りこめられては叶ふまじ。  
爰をば落ちて、尾張川墨股を防げやとて、  
取る物も取りあへず、我先に／＼と落ちゆ  
さける。餘にあわて騒ぎて、弓取るものは  
矢を知らず、矢を取るものは弓を知らず、  
我馬には人乗り、人の馬には我のり、繋ぎ  
たる馬に乗りて馳すれば、株を廻る事限な  
し。其邊近き宿々より、遊遊女ども召し  
あつめ、遊び酒宴しけるが、或は首割割ら  
れ、或は腹踏み折られて、なめき叫ぶ事お

びたよし。(平家物語)  
●いつの年よりも、五月雨晴間なくて、富  
士川龍川など、えもいはずみなぎり騒ぎ  
て、いかなる龍馬も打渡し難ければ、攻め  
登る武士ども、あやしくなやめり。か  
れどもつひに都ちかづくよききゆれば、  
君の御武者もいでたつ。其勢六萬餘騎とか  
や。宇治瀬田へわかつかはす。世の中ひ  
よきのしるさま、言の葉も及ばず、まね  
び難し。あるは深き山へにげこもり、遠き  
せかいにおち下り、すべてやすげなく騒ぎ  
みちたり。いかああらんと、君も御心みだれ  
て思しまどふ。かねてはたげくみえし人々  
も、まことのきはになりぬれば、いと心あ  
わたしく、色を失ひたる様ども頼もしげ  
なし。(増鏡)  
●さる程に六波羅には、五條橋を毀ち寄せ、  
橋桁に掻きてまつ所に、源氏即押寄せて、  
関を咄と作りければ、清盛親波に驚きて物  
具せられけるが、兜を取りて逆に着給へ  
ば、侍ども御兜逆に候と申せば、臆してや見  
ゆらんと思はれければ、主上渡らせ給へば、  
殿の方へ向はよ、君を後になし進らせんが  
恐れなる間、逆にはさるぞかしと宣へば、

重盛何と宜へども、隠して見えられたるな、打立てしものどとて、五百餘騎にてか

●わしや誰とも問ふよしなく、共にあきる  
●三勝は、平三と面をわはし、思ひまどへる  
油断を見て、椽がはなふみならずし、七年以前三條河原にて、脚平足平をころしたる、笠松平三市の正の仰をうけ、からめ捕らん爲に向へり。覺期せよと罵りもあはず、蝶九郎つと走り入り、火鉢をとつて投げつければ、行燈滅えて發と立つ灰に、咽びて見も嬌し意ならず、周章し驚きおそれて、泣くお通を抱き寄する。三勝もたえてせんすべなかりける。(馬琴)

●罪耳にびつくり目覺す人々、こりや何事ととうつく中、亭主が注進先に立ち、梶原が家來番勘三郎、大勢引連れかけ來り、それ選すなと下知すれば、捕つたくと亂れ入る。音に驚く家内の騒動、實ひわななきあつたふた、あやふさこわさし暗紛れ、行常るやらこけるやら、上を下へと立さわぐ。風もはげしき夜半の空、星さへ雲に覆はれて、道しあやうく物すこき。(淨瑠璃、盛衰記)

●門に居るは傳兵衛ぢや、おのれを入れてよい物かと、いふしがたく胸ぶるひ。コレナア兄様、わしや表に居るわいな。何ぢや表にゐるわいなア。ヤア其のこわ色おいてくれ。そんな事喰ふおれぢやないわい。母者人々々傳兵衛がおしゆんを殺しに來た故、今表へたて出した。おれ一人では手が廻らぬ。こなたも加勢してくだされ。加勢々々とうろくくく、うろたへ騒ぎ母親も、何ぢや、傳兵衛の加勢、ムいまた外に同類でもあるのかと、探りよつたる傳兵衛が傍、コンくおしゆんふるふことはない。母や兄が付いて居る。マア氣を静めやとなせさする、背の手ざはり合点行かず。(淨瑠璃、河原の逢引)

●狂人の跡倉へ蜂が道入つたやう。(假説)  
●重盛烏帽直衣而入。宗盛叩其袖曰、公何以不被甲。重盛曰、汝等何以被甲。公曰、敵人在乎。吾爲大臣大将、自非有寇賊犯國、則不立被甲也。清盛望見之、遷起、表黒衣而出、數正襟、誨詰甲視。(山陽)

●高山重忠以下、皆附頼朝、以二十萬騎至河東、使使者來貽書、多設言、忠清

勳維盛、斬其使、相持未戰、我軍夜閉、水禽起、相驚以爲敵大至也、人馬相踏藉而走。維盛怒欲留戰、忠清固諫乃西歸。(同)

「らくくわ」落花

綠暗。紅稀。亂紅。紅雨。繽紛。片々。紛々。墮雨。墮風。鋪地。うつらふ。花さそふ。花のゆくへ。香さへとまらぬ。雪とちる。ちりかひくもる。きえぬ雪。散りつもる。風にまよふ。

●ちるぞめでたきとか、花のためいとほし。たえて櫻のといへるも、いと心づよしや。今日ぞ我世の限とうちながめ、惜しみかかぬ吾もちりなばと來む世をさへ、かこぢけんこそ、いと優に心深う聞ゆれ。此頃あるひじりの、人のくるがうるさしとて、いみじき山の花ども、きり捨てけりとか。よし何がしの中納言ばかりにはあらずとも、花をば惜む物とは知りぬべきを、色即是空の法師だてら、いとにくしとにくし。さり

て垣ゆひまはし、一枝をだにと、ふくつてく守りなると、又にくしやなど、思ひつくる程、夕山おろし吹き立ちて、花の雪まことばすばかりなれば、まことにおもひ消えわく。(文雄)

●彌生の頃、日のうちかなるに、女院の御所の御庭に散りつもりける花のいと多かりければ、伴のみやつ、召させ給ひて、一所に集めさせ給へば、高さ五尺ばかり程の山の形になりけるを、いと興せさせ給ひて、吉野の花を移し山なれば、あらし山と名付けさせ給ひて、人々に歌詠ませ、上にも奏し給ひければ、明日の程に渡らせ給ひてんとたまはせ給ひけるに、其夜風のほげしく吹て、いひがひなくなりけり。(松翁)

●九日、臨時の祭なり。使にまゐる。花もさかりなるに、風少し吹きて、散りまがふ花の下に、舞人ども繪に書きたらんやうなり。立ち舞ふ袖の氣色、神垣も思ひやられ、待ちえたる御世の初に咲きにほふ花のかざしのいかよ見るらん。(中務内侍)

●實にくみれば山おろしの、木々の梢に吹き落ちて、花のみかまは白妙の波かと思れば上より散る、櫻か、雪か、波か、花かと、浮き立つ雲の、河風に、散れば波も櫻川、流るゝ花をすくはん。(謡曲、櫻川)

●實にや春を送るに、舟車を動かす事を用ゐず。唯殘鶯と落花とに別る。(謡曲、藤)

●夫れ朝に落花を踏んで相伴つて出づ。暮には飛鳥に隨つて一時に歸る。(謡曲、四行櫻)

●これ此花は車返し、櫻の数も多き中、取り分け人の賞玩するは、色香の妙なる計りでなし。散らさば清き花の本性。譬へていはよそなたの姿、又アレアノ床の掛物は定めて開きも及びつらん。唐土の玄宗皇帝、御寵愛の楊貴妃と、沉香亭に引籠り、しめてからんで横笛の、音に聞えし二人が申、天に有らば比翼の鳥、地にあらば連理の枝と、契り合ひたる睡言も、果は馬鬼が憂き別れ、まづ其如く此花も、千世も連理の榮なと、思ふにかひも嵐といふ妨にあふ時は、枝に別れの落花微塵、アあつたら花を散ら

さうより、枝を分つて日影に生けられ、仇に吹きくる風をば、よける思案がありそなもの。(淨瑠璃、朝顔話)

●久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらん。(友則)

●終にまた梢にかへるものならば散るをや花のさかりとは見ん。(祐盛)

●山寺の春の夕ぐれ來て見れば入相のかねに花ぞちりける。(能因)

●曇なきかげばかりなや詠めまし散りける花のかげなかりせば。(經信)

●ながむべき残りの春をかぞふれば花と共にも散る涙かな。(俊忠)

●菅のねの長き春日に袖たれてみんと思ひし花ちりにけり。(眞淵)

●なしとおもふ心よいか山さくらちるこそ花のさかりなりけれ。(千隆)

●大ふねのかとりの磯に花ぞちるおき栖の沖に風たつらし。(魚彦)

●花散らす暗燈の鉢や夜の樂。(升六)  
 ●葉ながら雨の口ころや落つる花。(召波)  
 ●花散りて又しづかなり園城寺。(鬼貞)  
 ●二十とせの小町が肩に落花散。(几重)  
 ●潘筵に落花なかく山路哉。(青蓮)  
 ●轉戸出や落花手を打つ嬉しさに。(風雪)  
 ●うめ櫻落花なふまぬ林哉。(曉台)  
 ●我奴落花に朝暈ゆるしけり。(其角)  
 ●竹くむ夕暮藤の落花かな。(白雄)  
 ●めも口もあかぬ跡と思ふうち吹雪のこ  
 ●花や散るらん。(吉住)  
 ●咲く花はちりもいとへど雪と名の落ちつ  
 ●いてみる花の木の下。(筆成)  
 ●十分に咲けばゆきにも庭櫻ちるをひひ  
 ●や思ふ物から。(鐘守)  
 ●星引の山風ふきてちる花を谷へけおとす  
 ●獅子のこざくら。(玄黄)  
 ●人ごとにかはる心もへだてなくをしむは  
 ●花のちる日なりけり。(清風)  
 ●ちる花なふまじとすれば雪よりも行きな  
 ●づみけり春山道。(直樹)  
 ●時雨せぬ夜半も淋しき聞きわけて袖ぬら  
 ●せとや木のはちるらん。(琴音)  
 ●木の木の軒に花や散らすらん檀を枕の春

の夢介。(披柳)  
 ●一二りんちりゆくもなまよしの川この干  
 ●金の花のせなかで。(方丸)  
 ●關寺の入相に散る花の道。(川柳)  
 ●落花して雲にうづもる信濃坂。(同)  
 ●櫻の落花橋の御膳僧。(同)  
 ●夜櫻は四角な花の散るもあり。(同)  
 ●一口商ひ落花をひんもぎり。(同)  
 ●かはらげがそれて櫻の花が散り。(同)  
 ●落花枝にかへらす。(俚諺)  
 ●落花狼藉。(同)  
 ●蝶辭樹頭。母逐水流。流水無情。徒  
 ●伴。幾時。因風悽。母。蝶。客。來。三  
 ●徑。珠。履。珠。履。母。網。蛛。絲。網。離。母。  
 ●墮。汗。池。去。恐。網。或。入。宮。掖。際。際。  
 ●額。從。此。名。粧。休。稱。籍。々。或。傍。舞。廳。  
 ●故。々。飛。揚。承。歡。無。極。取。悅。君。王。或。有。  
 ●少女。花。容。自。負。搖。落。傷。情。舒。彩。輕。受。  
 ●或有。才。人。聚。以。爲。茵。飲。酒。淋。樂。誇。示  
 ●衆。賓。側。身。天。壤。惟。汝。堪。賞。(王暉)  
 ●世上。韶。華。難。久。淹。獨。憐。香。鬢。與。心。戚。椒  
 ●房。一。夜。雨。鳴。砌。關。若。連。朝。風。捲。塵。泛。水  
 ●暫。察。橋。脚。駐。委。泥。終。入。展。旗。粘。渡。陽  
 ●詩。客。春。眠。足。啼。鳥。啞。寂。午。橋。(茶山)

●樹頭樹底竟殘紅。一片西飛一片東。自  
 ●是桃花貪結子。教人恨五更風。(王建)  
 ●已分將身著地飛。那羞踐踏損光輝。  
 ●無端又被春風誤。吹落西家不得歸。(韓愈)  
 ●自恨尋芳到已遲。往年曾見未開時。如  
 ●今風擺花狼藉。綠葉成陰子滿枝。(杜牧)  
 ●飄拂衣襟。蕊拂杯。遊枝閑共蝶徘徊。  
 ●春風滿目還惆悵。半欲離披半未開。(郭愈)  
 ●昨日看花花滿枝。今朝爛漫點清池。無  
 ●情莫抱東風恨。作意開時是謝時。(郭愈)  
 ●蝶醉蜂狂香心濃。晚來階下墜哀紅。開  
 ●時費盡陽和力。落處難堪一陣風。(贊寧)  
 ●烟水初銷見萬家。東風吹柳萬條斜。大  
 ●堤欲上誰相伴。馬踏春泥半是花。(千鶴)  
 ●古陵松柏吼天風。山寺尋春夕寂寥。看  
 ●雪老僧時較雪。落花深處說南朝。(竹外)  
 ●石泉經雨響如崩。夜對山僧待月升。  
 ●春戶不關風暗入。落花亂撲佛前燈。(同)  
 ●萬人買醉覺芳菲。感慨誰能與我同。恨

殺殘紅飛向北。廷元陵上落花風。(杏坪)  
 ●春花面々關入爾暢之筵。晚鶯聲々豫三  
 ●誦誦之座。(後江相公)  
 ●落花不語空辭樹。流水無心自入池。  
 ●(白居易)  
 ●離閣風翔激。樓下樓娃袖願階。階。  
 ●(晉三品)

篠色も香も知る人に、見せんとての所爲  
 なりけり。(馬琴)  
 ●かへらぬ昔なつかしき憂き身なかり慰  
 ●むる言のは多き子かなとあざみな笑ひ給ひ  
 ●そといひかけて、目をおしぬぐへどいとど  
 ●流るゝ蠟燭の火光にそむく面影の雨夜に月  
 ●の海棠の、花ものいふに異ならず。(同)  
 ●蠟燭の涙流るや夜の鶴。(蕪村)  
 ●蒲の穂や蠟燭そよぐ夕風。(御柳)  
 ●唐給には蠟燭で打つ砧哉。(菅原)  
 ●蠟燭のにはふ難の雨夜かな。(白雄)  
 ●蠟燭に鷹の眼の光かな。(木導)  
 ●蠟燭の子丁ばかり夕だつは雲井の龍のま  
 ●きかけし水。(笛成)  
 ●ながれゆく蠟燭の金がほしいなあ一夜三  
 ●百兩の船。(東作)  
 ●島台の昔戀しや蠟燭に蠟燭たて、ねがふ  
 ●後の世。(奇惠美)  
 ●火とせせる梅の下水こぼる夜も風に流る  
 ●よやどの蠟燭。(緑)  
 ●火をとす梅さへくるゝ春の夜の間にし  
 ●窓なてらすらふ燭。(萬久住)  
 ●らふそくのながれも水の緑なればはんば  
 ●りうつる川の月影。(名真のり)

●光岸寺ほそき元手は蠟燭のかけ賣けして  
 致し申さず。(音成)  
 ●雲龍のはやまきかけて蠟燭のしんまでめ  
 ●るゝ野路の夕立。(花丸)  
 ●蠟燭のなんちやうもある踊場はあがるて  
 ●うちんきがる提灯。(素人)  
 ●らふそくの流をたつるものごとて念の入  
 ●つたな上蠟といふ。(我胸)  
 ●ふみまなぶあかりとなるは蠟燭のしんと  
 ●してふる窓の初雪。(清喜)  
 ●やがてなん春に會津の蠟燭がいや臘月も  
 ●たつてゆくにぞ。(磯江)  
 ●らふそくのしんさる事も安火事。(川柳)  
 ●言ひふせる氣でらふそくのしんを切り。(同)  
 ●蠟燭は肩から漣たらして。(同)  
 ●振袖が立つと蠟燭ひいらひら。(同)  
 ●蠟燭を消すに男の息なかり。(同)  
 ●らうそくの灯ですい付けて足袋をぬぎ。(同)  
 ●蠟燭をけすと弓張かしこまり。(同)  
 ●蠟燭を立つれば鶴も無常なり。(同)  
 ●蠟燭が鼻をたらすも風のせい。(同)  
 ●らふそくは白無垢線香餅の袴。(同)

「らふそく」 蠟燭  
 蠟香。蠟花。香烟。燈々。清輝。  
 隨風。融蠟。炬燵。流淚。  
 ●されども盛長化物をば取りて抑へたる  
 ●ぞ、火をもちてよれと申しければ、誓固の  
 ●者共兎角して起きあがり、蠟燭を燈して見  
 ●るに、盛長が抑へたる膝を持ちあげんとす  
 ●ごめきける。諸人手に手み重ねて、遊さじ  
 ●と推す程に、大なる土器の破るゝ音して微  
 ●塵に碎けにけり。(太平記)  
 ●人まつ縁の夕化粧、鏡も刀白にかりしもの  
 ●な、うち向へども影くらき、口は涙りはて  
 ●ゝ燈火の、こゝへ肩かめ片こゝろ、かゝる爲  
 ●にと貯の、座席のこりの蠟燭も、流れ渡りの  
 ●身にしあれど、よるづよき日と曆手の、茶  
 ●碗をかへす系座に、建てゝ彩る唇べにの、

の夢介。(披柳)  
 ●一二りんちりゆくもなまよしの川この干  
 ●金の花のせなかで。(方丸)  
 ●關寺の入相に散る花の道。(川柳)  
 ●落花して雲にうづもる信濃坂。(同)  
 ●櫻の落花橋の御膳僧。(同)  
 ●夜櫻は四角な花の散るもあり。(同)  
 ●一口商ひ落花をひんもぎり。(同)  
 ●かはらげがそれて櫻の花が散り。(同)  
 ●落花枝にかへらす。(俚諺)  
 ●落花狼藉。(同)  
 ●蝶辭樹頭。母逐水流。流水無情。徒  
 ●伴。幾時。因風悽。母。蝶。客。來。三  
 ●徑。珠。履。珠。履。母。網。蛛。絲。網。離。母。  
 ●墮。汗。池。去。恐。網。或。入。宮。掖。際。際。  
 ●額。從。此。名。粧。休。稱。籍。々。或。傍。舞。廳。  
 ●故。々。飛。揚。承。歡。無。極。取。悅。君。王。或。有。  
 ●少女。花。容。自。負。搖。落。傷。情。舒。彩。輕。受。  
 ●或有。才。人。聚。以。爲。茵。飲。酒。淋。樂。誇。示  
 ●衆。賓。側。身。天。壤。惟。汝。堪。賞。(王暉)  
 ●世上。韶。華。難。久。淹。獨。憐。香。鬢。與。心。戚。椒  
 ●房。一。夜。雨。鳴。砌。關。若。連。朝。風。捲。塵。泛。水  
 ●暫。察。橋。脚。駐。委。泥。終。入。展。旗。粘。渡。陽  
 ●詩。客。春。眠。足。啼。鳥。啞。寂。午。橋。(茶山)

●樹頭樹底竟殘紅。一片西飛一片東。自  
 ●是桃花貪結子。教人恨五更風。(王建)  
 ●已分將身著地飛。那羞踐踏損光輝。  
 ●無端又被春風誤。吹落西家不得歸。(韓愈)  
 ●自恨尋芳到已遲。往年曾見未開時。如  
 ●今風擺花狼藉。綠葉成陰子滿枝。(杜牧)  
 ●飄拂衣襟。蕊拂杯。遊枝閑共蝶徘徊。  
 ●春風滿目還惆悵。半欲離披半未開。(郭愈)  
 ●昨日看花花滿枝。今朝爛漫點清池。無  
 ●情莫抱東風恨。作意開時是謝時。(郭愈)  
 ●蝶醉蜂狂香心濃。晚來階下墜哀紅。開  
 ●時費盡陽和力。落處難堪一陣風。(贊寧)  
 ●烟水初銷見萬家。東風吹柳萬條斜。大  
 ●堤欲上誰相伴。馬踏春泥半是花。(千鶴)  
 ●古陵松柏吼天風。山寺尋春夕寂寥。看  
 ●雪老僧時較雪。落花深處說南朝。(竹外)  
 ●石泉經雨響如崩。夜對山僧待月升。  
 ●春戶不關風暗入。落花亂撲佛前燈。(同)  
 ●萬人買醉覺芳菲。感慨誰能與我同。恨

●一へんはあは蠟燭をみんが買ひ。(同)  
 ●會津産蠟燭最著。有華蠟燭者、繪其屑、華紋繡錯、燦可眩目。余數得於其人、試燒之、非加明也。則置之篋、以供觀玩、而用以燒、乃無華者、夫蠟燭何用哉、玩之邪、抑照物也。有照物而明矣、雖無可觀可玩、而名爲燭、愧矣。名爲燭而其質無益於明、安在其爲蠟燭乎。且求物之可觀玩者、何必用蠟燭。今儒士亦國之蠟燭也、爲物雖微、無此莫以燭治亂而救昏暗、徒其香潤、舍其光明、舍之可憐、以待舉用、唯不舉也、舉則可以辨群物、照四強、類如椽之燭者、則古之賢才豪傑也。次之而下、隨其質之大小、皆可用燭、是之謂儒已、而今或以爲席上之珍、以玩物視之、而儒亦以玩物自視、其名曰儒、儒邪、佛優邪、徒深給其外、而驗其中之通且明不、如儒儒之俗士、是華蠟燭耳。然彼燭也、特曰其華之無益於明、云爾、非不可燭也。是不足以比焉邪、添川仲頌、會津産也。質厚好學、善文而不街於人、吾知其爲儒不爲華蠟燭也。於其歸、言此以勉之。(山陽)

●景勝銀紅香比蘭。一條白玉道人寒。他時紫禁春風夜。醉草天書仔細看。(孫氏)  
 ●惜別終宵話不休。燈々燈燭照離愁。蠟花本は無情物。特向人前也淚流。(張弘範)  
 ●春城無處不飛花。寒食東風御柳斜。日暮漢宮傳蠟燭。香烟散入五侯家。(韓翃)  
**「らんかん」欄干**  
 勾欄。玉欄。曲欄。畫欄。幽欄。おぼしま。  
 ●初瀬などに詣で、局などするほどは、樽階のもとに車引きよせて立てたるに、帯ばかりしたる若き法師ばらの、履といふものをはきて、聊つみもなく下り上るとして、何ともなき経のはしうちよみ、俱舎の頰を少しいひつゞけありくこそ、所につけてなかしけれ。わが上るはいとあやうく、傍によりて高欄おさへてゆくものを、唯板敷などのやうに思ひたるもなかし。(清少納言)  
 ●二人共に湖水の波をわけて、水中に入ること五十餘町ありて、一の樓門あり。開きて内へ入るに、珊瑚の沙厚く、玉の盤暖におぼしま。

して、落花自續紛たり。失樓紫殿玉の欄干、金を鎚にし銀を柱とせり。其壯觀奇麗未嘗て目にも見ず、耳にも聞かざりし所なり。  
 ●さる程に三勝はふり亂す黒髪の長町より、喘ぎ、裳踏みかへしておひかされば、全八はお通を引抱へて、橋の直中に立ちとまり、欄干に身をよせかけ、しばらくこれをまつ程に、三勝やがて走り來つ。(馬琴)  
 ●御堂の東のつま、北むきにおしあけたる月のまへ、いけにつくりおろしたる、橋の高欄をおさへて、宮の大夫はぬたまへり。(紫式部)  
 ●さるにても我夫の、秋より先に必と、ゆふべの敷は重なれど、あだし言葉の人心、頼りてみぬ夜はつれども、欄干に立ちつくして、そなたの空よと眺むれば、夕暮の秋風、あらし山おろし野分も、あの松を、そはおとづるれ。(謡曲、斑女)  
 ●荊柯がひかへたる、御衣の袖を引つ切つて、屏風を躍り越え、電光の激するよそほひ、殿の白玉盤に落ちて、欄干をはしる心地して、あかよれの御柱に、たちかくれさせ給ひしかば。(謡曲、成陽宮)

●公時をばかさんなどは蠟燭が、おのれ狐狸のわざならむ。いで物見せんと打つて掛れば中に消え、振り返れば欄干の上に立つたる其姿、のがまじと又斬りかくれば、右に跳ね越え左に飛び、只蝶鳥の如くにて、彼方へ走り此方へ追ひ、何處迄も逃さじと、跡を慕うて追うて行く。(淨瑠璃、花山院都賀)  
 ●ひとときておぼしまによる衣手に池のみくさの露ぞりける。(千陸)  
 ●おぼしま女の出づる若葉かな。(召波)  
 ●欄干に夜ちる花の立すがた。(羽紅)  
 ●欄の欄干に凭れて扇かな。(一茶)  
 ●水に臨む欄干高し青嵐。(白雄)  
 ●月滿ちて欄干うごく今宵かな。(由之)  
 ●十七夜や欄干に人の顔みゆる。(半琴)  
 ●笠をぬき夜ころの月の欄干にとばすをいと清水の花。(朝風)  
 ●欄干で俊藤太は鼓を張り。(川柳)  
 ●しるもしらぬし秋の夜の、月まつほどの今宵しも、家々醉賞して欄干に、よるべよるべの契かな。(俗話)  
 ●欄の欄干へ腰うちかけて、そよりくんと

ふきくる風は、君さんたよりかなつかしや。(同)  
 ●橋の欄干に腰をかけ、沖を遙に眺むれば、沖のかもろがみつゝれて、みつゝれて眺まじく、よらねながらも君をひし。(同)  
 ●てすりによりて假粧の水を、何處にすてよか虫の聲。(同)  
 ●落香の國所は欄干にとよまる。(俚諺)  
 ●欄干亞字俯晴海。水淨沙明落照間。樓起湘簾井類坐。一痕雲影過前山。(山陽)  
 ●草遮同燈一樹鳴。雲樹深々碧殿寒。明月自來還自去。更無人倚玉欄干。(徹骨)  
 ●孤嶼池濱春漲滿。小欄花韻午晴初。(司空圖)  
 ●白足高僧解達觀。安排春事滿幽欄。(蘇軾)  
 ●翠酒盤衣竹滿欄。雨餘爽氣捲西山。(周權)  
 ●高梧葉脫金井寒。雙月夜桂珠闌干。(岑安卿)  
 ●岳陽城下水淺々。獨上危樓倚曲欄。(白居易)

●一州如斗帶溪山。空翠家々遠畫欄。(吳儂)  
 ●秋聲誰種得。蕭瑟在池欄。(曹松)  
 ●小欄花盡蝶。靜院醉醒蛩。(李商隱)  
**「らんせい」亂世**  
 亂離。擾亂。離散。流浪。恟々。戰亂。戰國。みだるゝ世。  
 ●此年享德の夏、鎌倉の御所成兵朝臣、管領の上杉と御中放けて、館兵火に跡なく滅びければ、御所は總州の御味方へ落ちさせ給ふより、關の東忽に亂れて、心々の世の中となりしほどに、老いたるは山ににげかくれ、強きは軍民にもよほされ、けふは此所を焼きはらふ、明日は敵のよせ來るぞと、女わらべ等は東西に逃げまどひて泣きかたしむ。勝四郎が妻なるものも、いづちへも逃れんものと思ひしかど、此秋を待てと、きこえし夫の言を頼みつゝも、安からぬ心に目をかぞへて暮しける。秋にもなりしかど、風の便もあらねば、世とともに憑なき人心かなと、恨みかなしおもひくづなれ

身のうきは人しも告げじおふ坂の夕つ  
け島よ秋もくれぬと。  
かくよめれども、固あまた隔てぬれば、い  
ひおくるべき傳もなし。世の中騒がしき  
つれて、人の心も恐しくなりけり。通問  
とぶらふ人も、宮木がかたらの愛たきを見  
ては、ままんにすかしいざなへども、三  
貞の賢き操を守りてつらくもてなし、後  
戸を開て見えざりけり。一人の婦女も去  
りて、すしの時しむなしく、其年もくれぬ  
年あらたまりぬれども、猶なまならず。あま  
つさへ去年の秋京家の下知として、美濃の  
國郡上の主、東の下野の守常縁に御旗を給  
ひて、下野の領所に下り、氏族千葉の實胤  
とはかりて、賞むるにより、御所方も固く  
守りて拒ぎ戦ひけるほどに、いつ果つべき  
とも見えず。野伏等はこかしこに茶をか  
まへて、火を放ちて此を奪ふ。八州すべて  
安き所もなく、淺ましき世の様なりけり。  
勝四郎宗部に従ひて京にゆき、絹とも残り  
なく交易せしほどに、當時都は華美を好む  
節なれば、よき徳とりて東に歸る用意をな  
すに、今度上杉の兵鎌倉の御所を陥し、な  
ほ御跡をたうて責め討てば、故郷の邊は

干戈みち／＼て、涿鹿の巷となりしよしな  
いひはやす。まのあたりなるさへ偽おほき  
世説なるを、まして白雲の八重に隔りし國  
なれば、心も心ならず。八月のはじめ京を  
たち出で、岐曾の眞坂を日ぐらしにこえ  
けるに、落人どもみちをさへて、行李も残  
なく奪はれしが上に、人のかたるをきけ  
ば、是より東の方は所々に新關をすて、  
旅客の往來をだにゆるさざるよし。さては  
消息をすべきたづきもなし。家も兵火にや  
亡びなん。妻も世に生きてあらじ。まから  
ば古郷とて鬼のすむ所なりとて、こよよ  
り又京に引きかへすに、近江の國に入りて、  
にはかに心地あしく、熱き病を癒ふ。  
(秋成)

宗の時に至て、其頃君上の廢立、多くは人  
臣の手に出でしかば、楊復恭が昭宗を己が  
たてたるとて、貢心門生天子といひしを  
こそ、古今になき事なれど、あまりの事に  
をかしかりしが、其後我朝近代の野史にて、  
新参の主人譜代の家人に背くやうやあると  
いひし事あるを見て、さては亂世の風俗、  
からもやまともよく似たる事よと思ひ侍り  
し。  
(鳩巢)

●東にも上野の國に源義貞といふものあり。高氏が一族なり、世の亂に思をおこし、いくばくならぬ勢にて鎌倉にうち臨みけるに、高時等運命極りにければ、國々の兵つき隨ふ事、風の草を靡すが如くして、五月の二十二日にや、高時を初として、多くの一族皆自滅してければ、鎌倉また平ぎぬ。(親房)

●天道も神明も、いかにともせぬ事なれど、邪なるものは久しからずして亡び、亂れる世も正にかへるは、今古の理なり。これをよく辨へ知るを稽古といふ。(同)

●それ朝に紅顔あつて、世路に誇るといへども、少には白骨となつて郊原に朽ちぬ。昔は源平左右にして、朝家を守護し奉り、御代を治め國家をしづめて、萬機の政すな

ほなりしに、保元平治の世のみだれ、いかなる時か来りけん、思はざりしに弓馬の騒ぎ、ひとへに時節到来なり。(謡曲、朝長)

●實にも上臈都人は、情も深く心もやさしと父母の物語、今こそ思ひ合せたり。かゝる亂の世の中に、弓矢叫びの音はなく、糸竹の曲をしらべ、詩歌管絃を催さる。ハア床しさよ。いかなれば、我々は邪見の田舎に生れ出で、鏡兜弓矢をとり、かくやんごとなき人々を、敵として立ち向ひ、修羅の劍をとぐ事は、淺ましきと計りにて、覺えず涙を流したり。まだうら若き小次郎が、身の程々を涙み分けて、感ずる心ぞしほらしき。後の方に蹄の音、誰なるらんと何ふ内、平山の武者所、馬上ゆしくかけ来り、小次郎が影見るよりも、敵か味方かいぶかしく、何者なるぞと聲かくれば、小次郎もすかし見て、ヤア末重殿か、さいふ和殿は、コハ小次郎かと馬より下り立ち。  
(浄瑠璃、一の谷)

●みだれたる世はたれんものがるらんをさまる時をひとりすてばや。(長流)

●亂世に茶に暮して利休翁。(川柳)

●龍馬來。龍顏開。龍驤一批天震雷。天仗

別有馬惡鬣、尙方之劍不可乞。運笏而逝猶戀關。忍開萬蹄再染血。龍馬驚。天步驟。徒從誰知元弘際。房星無精。日月晦冥。巨身在。外心在。君。化爲赤電。導君行。  
(山陽)

●群雄逐鹿漫爭先。誰識驅除開大賢。晉國霸圖由一戰。漢家號令出三鞭。(同)

りノ部

利

利益。利得。利欲。利潤。利養。名利。遺利。

●又或時此音紙左衛門、夜に入りて出仕しけるに、いつも腰袋に入れて持ちたる錢を、十文取りはづして滑河へぞ落し入れたりけるを、少事のものなれば、よしさてもあれかしとてこそ、行き過ぐべかりしか。

以の外に周章で、其邊の町屋へ人を走らしかし、錢五十文を以て、續松を十把かひて、則是を燃して遂に十文の錢をぞ求め得たりける。後日に是なきよて、十文の錢を求めんとて、五十にて續松を買ひて燃したるは、小利大損かなと笑ひければ、音紙左衛門肩を振めて、さればこそ御邊達は、愚にて世の費をも知らず、民を苦しむ心なき人なれ。錢十文は只今求めずば、滑河の底に沈みて永く失せぬべし。某が續松を買はせつる五十の錢は、商人の家に止まりて、永く失すべからず。我損は商人の利なり。彼と我と何の差別がある。彼此六十文の錢一をも失はず。豈天下の利にあらずやと、爪弾をして申しければ、難じて笑ひつる傍の人々、舌を振ひてぞ感づける。  
(太平記)

●名利に役はれて、閑なる暇なく、一生を苦しむるこそ愚なれ。財多ければ、身を護るに感し。害をかひ、煩を招く嫌なり。身の後には、金をして北斗を支ふとも、人の爲にぞ累るべき。愚なる人の目を悦ばしむるたのしみ、又あぢきなし。大なる車、肥えたる馬、金玉の飾も、心あらん人は、うたて愚なりとぞ見るべき。金は山にすて、玉

は淵になぐべし。利に惑ふは、すぐれて恐なる人なり。(兼好)

●往古に富める人は、天の時をはかり、地の利を察めて、おのづからなる富貴をうるなり。呂留齊に封ぜられて民に産業を教ふれば、海方の入利に走りて、こゝに來むかふ。管仲九たび諸侯をあはせて、身は陪臣ながら、富貴は列國の君にまされり。范蠡、子貢、白圭が徒、財を聚ぎ利を遂うて、巨萬の金をつみなす。これらの人をつらねて、貸殖傳を著し侍るを、其いふ所いやしとて、のちの博士筆を競うて勝るは、ふかくさとらざりし人の語なり。(秋成)

●須臾に生滅し、刹那に離散す。恨めしきかなや、釋迦大師の慈悲の教を忘れ、悲しきかなや、闍維法王の呵責の言葉を聞く。名利身を助くれども、いまだ北邙の煙を免れず、恩愛心を惜ませども、誰か黄泉の資に隨はざる。是が爲めに馳走す、所得いくばくの利ぞや。(謠曲、歌占)

給へ。う。無慾やな父とも知らずおとどひは、利益をなさんと往來の、僧を供養し給ふぞや。さらば留まり申すべし。(謠曲、水無瀬)

●去りながら世の人は、名利の二つに溺まれて、繕ひ飾る其中に、天下の民を救はんとて、黄金を泥に塗り糺し、文武兼備の名將の、短慮兇忽の汚名をうけ、國家を失ひ御命を、亡し給ふ陰徳を、看すく佛神三寶の、力にも及ばぬは、天の命の數限ある、鹽谷の御家滅亡の、時節到來淺ましやと、五臟を絞る血の涙。(淨瑠璃、伊呂波實記)

●商人のあらそふ道にあづき弓、よる引かるゝものゝふの友。(讀人不知)

●一月の利をすべつたりあぶらうり。(川柳)

●まけてかつ利は拜領のこばんじま。(同)

●しちの利はしりいせんといはれまい。(同)

●傾城の質利にうとき間が花。(同)

●利に二つあるは質屋の金と錢。(同)

●月は程なく入替の利にあきれ。(同)

●入替に持統天皇利を拂ひ。(同)

●ふてへやつ利ど、かつらも持つて來ず。(同)

●天は時地は利に走る初塵。(同)

●はつ松魚くふと裕も利をくらひ。(同)

●ことは質取て利に利を押しして行き。(同)

●にそく四そくは身を暖める、利息催促寒氣たつ。(俗語)

●利息を取るより利息を拂ふな。(俚諺)

●大利は利ならず。(同)

●一利あれば一害あり。(同)

●漁者、垂釣於伊水之上、樵者過之、弛増息、肩、坐於磐石之上、而問於漁者曰、魚可釣取乎。曰然。曰釣非、餌可乎。曰

否。曰非、鈞也、餌也。魚利食而見、害人利魚而害利、其利同也、其害異也。故問何故、漁者曰、于樵者也。與吾異治、安得、益、害、乎。然亦可、以爲、于、試、言、之、彼之利猶、此之利也、彼之害亦猶、此之害也。子知、其、小、未、知、其、大、魚、之、利、食、吾亦利乎、食、也。魚、之、害、吾亦害乎、食、也。子知、魚、終、日、得、食、爲、利、又、安、知、魚、終、日、不、得、食、不、爲、害、如、是、則、食、之、害、也、重、而、鈞、之、害、也、輕、子、知、吾、終、日、得、魚、爲、利、又、安、知、吾、終、日、不、得、魚、不、爲、害、也。如、是、則、吾、之、害、也、重、魚、之、害、也、輕、以、魚、之、一、身、當、人、之、一、食、則、魚、之、害、多、矣、以、人、之、一、身、當、魚、之、一、食、則、人、之、害、亦、多、矣、又、安、知、鈞、乎、大、江、大、海、則、無、異、地、之、患、焉、魚、利、乎、水、人、利、乎、陸、水、與、陸、異、其、利、一、也、魚、害、乎、餌、人、害、乎、財、餌、與、財、異、其、害、一、也、又、何、必、分、乎、彼、此、哉、

●漁樵問對  
●利、利、於、民、財、可、謂、利、利、於、身、利、於、國、皆、非、利、也、利、之、旨、利、猶、旨、美、之、爲、美、利、誠、難、旨、不、可、一、概、而、言、(報子)  
●君子喻、於、義、小人喻、於、利、(論語)

〔りより〕 龍

りノ部 りよ

神龍。蛟龍。飛騰。變化。天隅。海表。五采。九色。雷化。雲從。擎雲。駕霧。騰雲路。躍天池。たつ。雲さわぐ。日影にのぼる。龍の宮。

●かくて、義賢主従は、笠やどりせんよしのなれば、入江の松の下蔭に笠をかざして立ち給ふ。さる程に風雨ますます烈しく、或は晦く、或は明く、よせては碎けて、或は又立ちかへる涙を包みて、まひさがる雲の中に、物こそあれと見る目まばゆく、忽然として白龍あらはれ、光を放ち、涙をまき立て南をさしてぞ飛び去りける。且くして雨霽れ雲をまきり、日は入りながら影はなほ、海にのこりて波をいりどり、梢を傳ふ松の葉、吹き拂ふ風に散る玉は、沙石の中にもるび入る。山は遠うして翠ぶかく、巖は奇うしてまだ乾かず。ながめにあかぬ絶景佳絶も、身の愛きときは心止らず。氏元は義賢の、衣のしぶきを拂ひなとして、後れたる貞行を今かくとまつ程に、義賢海面を指して、さきに雨いと烈し

くて、立懸きたる涙の間に、霞雲類りにまひさがり、彼岩のほとりより、白龍の昇りしを、木曾介は見ざりしかと問はれてひたと足をつまんで、龍とは認め候はねど、あやしき物の股かとおぼしく、輝りかよやくこと麟のごときを、僅に見て候といへば、義賢うちうなづき、さればこそその事なれ、われはその尾と足のみ見たり。全身を見ざりしこと、慄むべく惜むべし。夫龍は神物也。變化もとより無なし。古人いへることあり。龍は立夏の節を俟て、分界して雨をやる。これを名づけて分龍といふ。今は則その時也。夫龍の靈なるや、昭々として近く顯はれ、隱々として深く潜む。龍は誠に鱗虫の長なり。かゝる故に、周公易を繫ぐとき、龍を聖人に比べたり。まかりといへども、龍は欲あり。聖人の無欲にしかず。こゝをもて、人或はこれをかひ、或はのり、或は屠る。今はその術傳ふるものなし。又佛説に龍王經あり。大凡雨を禱るもの、必まづこれを誦む。又法華經の提婆品に、八歳の龍女、成佛の説あり。善巧方便也といふとも、禱りて験かうるものあり。この故に龍を名づけて雨工といふ。亦これ



を雨師といふ。その形状を辨ずるときは、角は鹿に似て、頭は蛇に似たり。眼は鬼に似て頂は蛇に似たり。腹は鱗に似て、鱗は魚に似たり。その爪は鷹の如く、掌は虎の如く、その耳は牛に似たり。これを三停九似といふ。又その珠は簡にあり。きくときは角を以てす。喉の下、長徑尺、これを逆鱗と名けたり。物あつてこれに中れば、怒らずといふことなし。故に天子の怒り給ふを、逆鱗と申す也。雄龍のなくときは上に風ふき、雌龍のなくときは下に風ふく。その鬚竹筒をふくごとく、その吟ずるとき、金鉢を受るが如し。彼は故てつれだらゆかず。又群りあることなし。合するときは體をなし、散ずるときは草をなす。雲氣に乗じ、陰陽に委はれ、或は明に或は幽なり。大なるときは宇宙に徜徉し、小なるときは磐石の中にも隠る。春分には天に登り、秋分には淵に入り、夏を迎ふれば雲を渡きて鱗を奮ふ。これその時を樂むなり。冬となれば泥に淪み、潜り蟠つて敢て出でず。これその害を避くるなり。龍はすぐれて種類多し。飛龍あり、應龍あり、蛟龍あり、先龍あり、黃龍あり、青龍あり、赤龍あり、

白龍あり、元龍あり、黒龍あり。白龍物をはくときは地に入りて金となり、紫龍涎をたるるときは、その色透つて玉の如し。紫積花は龍の精也。變豹鬚いで薬に入る。鱗あるは蛟龍なり。異あるは應龍なり。角あるを龍龍といひ、又蚌龍ともこれをいふ。角なきを蛇龍といひ、又これを蝸龍といふ。又蒼龍は七宿也、班龍は九色なり。目百里の外を見る。これを名けて驪龍といひ、優樂自在なるものを福龍と名けたり。自在を得ざるは滯福龍、害をなすはこれ惡龍、人を殺すは毒龍なり。又苦みて雨を行は、これ則兼龍なり。又病龍のふらせし雨は、その水必腥し。未、昇天せざるもの、易に所謂蟠龍なり。蟠龍は長四丈、その色青黒うして、赤帶錦文の如し。火龍は高七尺あり、その色は眞紅にして、火龍炮を聚むるが如し。又疑龍あり、類龍あり。龍の性は淫にして、交らざる所なし。牛と交れば麒麟を産み、豕に合へば象を生み、馬と交れば龍馬を生む。又九の子を生む説あり。第一子を蒲牢といふ。鳴くことを好むものなり。鐘の龍頭はこれを象る。第二子を囚牛といふ。音を好むものなり。琴鼓の飾に

これをつく。第三子を蚩物といふ。呑むことを好むものなり。孟嘉飲器にこれを畫く。第四子を嘲風といふ。險を好むものなり。堂塔樓閣の瓦、これを象る。第五子を胆瓶といふ。殺すことを好むものなり。太刀の飾にこれをつく。第六子を負鼠といふ。こは文を好むものなり。いにしへの龍篆、印材の粗、文章星の下に畫く、飛龍の如きみな是也。等七子を狴犴といふ。訟を好むもの也。第八子を狻猊といふ。狻猊は乃獅子なり。坐することを好むものぞ。椅子曲承に象ることあり。第九子を霸下といふ。重きを負ふを好むものなり。鼎の足、火爐の下、凡物の枕とするもの、鬼面のごときは、則これなり。これらの外に又子あり。靈草は圓を好み、靈髮は水を好み、蟋蟀は星を好み、靈髮は風雨を好み、蝮虎は文采を好み、金猊は煙を好み、椒圖は口を閉づるを好み、勿斂は險に立つを好み、鱉魚は火を好み、金吾は睡らざるものとぞ。皆これ龍の種類なり。大なるかな龍の徳、易にとつては乾道なり、物にとつては神聖なり。この種類の多きこと、人に上智と下愚とあり、天子匹夫の如くなる歟。龍は威

徳をもて百獸を伏するものなり。天子も亦  
 威徳を以て百官を率ふ給ふ。故に天子褒  
 龍の御衣あり。天子の御顔を龍顔と稱へ、  
 又おん形體を龍體となへ、怒らせ給ふを  
 逆鱗といふ。みな是龍に象るなり。その徳  
 かぞへあぐべからず。今や白龍南に去る。  
 白きは源氏の服色なり。南は則房總、房總  
 は皇國の盡處なり。われその尾を見て頭を  
 見ず。僅にかの地を領せんのみ。汝は龍の  
 股を見たり。是わが股肱の臣たるべし。ま  
 は思はずやとまめやかに、和漢の書を読み、  
 古賢のべ、わがゆくすゑの事さへに、思  
 ひはかりし俊才教習に、氏元ふかく感佩  
 し。  
 (馬琴)

ば、ふと射殺して、首の玉は取りてん。遅  
 く来るやつばらを侍らじとの給ひて、船に  
 のりて、海毎にありき給ふに、いと遠くて  
 筑紫の方の海に、漕ぎ出で給ひぬ。如何し  
 けん、はやき風ふきて、世界くらがりて、  
 船を吹きもてありく。いづれの方とも知ら  
 ず、船を海中にまかり入りぬべく吹き廻し  
 て、浪は船にうちかけつゝ捲き入れ、神は  
 落ちかゝるやうに、閃きかゝるに、大納言  
 は感ひて、まだかゝるわびしきめは見ず。  
 いかならんとするぞとの給ふ。楳取答へて  
 申す。こゝら船に乗りてまかりありくに、ま  
 だかくわびしきめを見ず。御船海の底に入  
 らずば、神落ちかゝりぬべし。もしさいはひ  
 に神の助あらば、南海に吹きおほしぬべ  
 し。うたてあるまの御許に仕へ奉りて、す  
 るなる死をすべかめるかなとて、楳取な  
 く。大納言これを聞きての給はく、船に  
 のりては楳取の申す事をこそ高き山とも頼  
 め。などかくたのもしげなきことを申すぞ  
 と、あなへどなつきての給ふ。楳取答へて  
 申す。神ならねば、何事をか仕う奉らん。  
 風吹き浪激しけれども、神さへいたゞきに  
 落ちかゝるやうなるは、龍を殺さんと求め

給ひさふらへばかくあなり。暴風も龍の吹  
 かするなり。はや神に祈り給へといへば、  
 よき事なりとて、楳取の御神さしめせし  
 をぢなく心幼に龍を殺さんと思ひけり。今  
 より後は毛一筋をだに動かし奉らじと祝詞  
 をはなちて、立居なく／＼よび給ふ事。千  
 度ばかり申し給ふけにやあらん。やうやう  
 神なりやみぬ。少し明りて、風は猶はや  
 く吹く。楳取の曰く、これは龍の所爲に、  
 そありけれ。このふく風はよき方の風な  
 り、あしき方の風にはあらず。よき方に赴  
 きてふくなりといへども、大納言はこれを  
 聞き入れ給はず、三四日ふき返しよせ  
 たり。  
 (竹取物語)

●さる程に。和布刈の時至り、虎嘯くや風  
 早斬の、龍吟すれば雲起り雨となり、潮し  
 光り鳴動して、沖より龍神あらはれたり。  
 龍神すなはち現はれて、和布刈の所の水底  
 をうがち、拂ふや沙瀬に、こゆるぎの磯菜  
 摘む。めざしぬらすな沖に居れば、沖に居  
 れ波と夕沙を退け、屏風は立てたる如くに  
 分れて、海底の砂は平々たり。神主松明ふ  
 り立て、御鎌を持つて岩間を俯ひ、つた  
 ひ下つて半町ばかりの、海底の和布を刈り

歸り給へば、程なく跡に沙さし滿ちて、もとの如く荒海となつて、波白妙のわたつみ和田の原、天を没し、雲の波烟の波風、海上になまされば、蛇鉢は龍宮に飛んでぞ入りにける。  
 ●夜遊の舞樂も時過ぎて、有明方の月も落ちくる折からに、不思議や川波はげしく荒れて、二龍の姿は顯れたり。兩龍王は川波に浮び、彼御藥を捧ぐる氣色、汀に坐してぞ見えたりける。老翁悦の色をなして、彼客人の御意に、神道自在の秘術を顯はして、夜遊の戲なし給ふ。  
 ●夜遊の舞樂も時過ぎて、月すみわたる海づらに、波風しきりに鳴動して、下界の龍神あらはれたり。龍神湖上に出現して、ひかりもかどやく金銀珠玉を、かのまればとにさぐるけしき、ありがたりけるきどくかな。  
 ●龍は時を得て天地に嬉り、時を失へば守宮蚯蚓と身を滑む。我君の爲に軍慮をめぐらし、肺肝を砕くといへ共、頼家公の武運つたなく、なす事する事一ツもならず。此度の合戦は坂本城滅亡の時、天より亡ぼす其人の運命、へえ、無念の附憤止事なく、

最早計略の術盡果たる。  
 ●くちをしや雲ぬがくれにすむ龍も思ふ人に見えけるものを。  
 ●ちぎりあればうのはふきけるはまやにも龍の宮庭通ひしものを。  
 ●かくるれば硯の水をすみかにて雲井をわたる龍ぞあやしき。  
 ●あやしきも降りくる雨が一筋に雲ばかりこそたつと見えしか。  
 ●うつし給のなからましかば天とぶや龍てふ神は世に見ざらまし。  
 ●なみなたて雲をおこしてふじのねもおよばぬ空にのぼるたつ哉。  
 ●龍の落ちし烟見に行くや雲の峯。  
 ●白雲の龍をつむや梅の花。  
 ●龍宮に三日居たれば老の春。  
 ●若竹や龍遣ひのぼる藪かうし。  
 ●夫れほどに惜む翁龍となれ。  
 ●虹吹いてぬけたか涼し龍の牙。  
 ●人中の龍駆け出でん四方の春。  
 ●枯枝に龍龍みたり葛紅葉。  
 ●寒岩離に脊中の龍の披露哉。  
 ●金銀をひめし長者のくらしも得ること

かたき龍の玉哉。  
 ●龍齒く筆を洗へる水鉢に透浪たてし起す黒雲。  
 ●諏訪の湖ひれふる鯉は霞ふじを飛び越す龍となる澤の音。  
 ●ふる雨に風の翅を添へて空かけるは是や飛龍なるらん。  
 ●龍の住む池田の賤が炭がまのけぶりは雲をはくかとぞみる。  
 ●一ふきり千里はげしく荒風に龍のむかへる夕立の空。  
 ●白波の玉しきわたす沖津洲は龍の都に近からんかも。  
 ●雲をまき水をかへしつ天の戸をたつは磯に玉や打つらし。  
 ●すべらきにたとへし龍の顔も亦見る事かたき雲の上かな。  
 ●重陽の菊の流に千代や経し龍も高きにのぼる大空。  
 ●波うつ風の浪間にすむ龍は笛の音をしも出すなるらん。  
 ●上下とまかまく龍はまきあけて加茂の川水雨とふらさん。  
 ●雨をこきや龍は肩から天くだり。  
 ●

●白龍は淵間をみると思ひ出し。  
 ●恐龍の中にはだかの立すがた。  
 ●御出陣後のかしらへ龍を召し。  
 ●はいふきの中から龍王舞ひ上る。  
 ●日當りの戸扱不二越す煙の龍。  
 ●淵間の龍も雨を呼ぶ古伽藍。  
 ●出来築の龍を經師屋巻き上げる。  
 ●龍神は歌と發句で二度選み。  
 ●龍吟すれば雲おこる。  
 ●龍は一寸にして昇天の氣を含む。  
 ●龍の領をなづるが如し。  
 ●龍頭蛇尾。  
 ●龍氣成、雲固弗、龍於龍也。然龍乘是氣、洋洋乎玄間、薄日月、伏光景、感震電、神變化、水上下、涸陸谷、雲亦撰性矣哉。雲龍之所、能使爲雲也。若龍之靈、則非雲之所、能使爲龍也。然龍邪、得雲、無以神其靈矣。失其所、憑依、信不可與異哉。其所憑依、乃其所自爲也。易曰、雲從龍。既曰龍、雲從之矣。  
 ●何年白竹千鈞弩。射殺南山雪毛虎。至今頭骨帶霜牙。尚作四海毛蟲祖。東方久旱千里赤。三月行人口生土。碧潭近在古城

東、神物所、誰敢侮。上欲、谷、擁、巖、下、應、清、河、通、水、府、眼、光、作、電、走、金、蛇、鼻、息、爲、雲、擾、煙、縹、當年、復、圖、傳、帝、命、在、右、義、解、詔、神、馬、瀾、表、懷、寶、但、貪、眠、滿、腹、雷、霆、指、不、吐、赤、龍、白、虎、飛、明、日、倒、捲、黃、河、作、飛、雨、嗟、香、豈、樂、聞、兩、雄、有、事、徑、須、煩、一、怒。  
 ●左轉爲龍王閣、閣下有池、泉涓々出、石隙、池深潤不盈丈、此豈龍潛之所邪。  
 ●抑龍爲神物、得點水、便可飛騰、則此一勻之多、亦可藏鱗伏甲也。  
 ●初九、曰潛龍勿用、何謂也。子曰、龍德而隱者也。不與乎世、不成乎名、避世無悶、不見是而無悶、樂則行、憂則違、之、確乎其不可拔、潛龍也。  
 ●飛龍乘雲、騰蛇遊霧、雲龍霧、而龍蛇與、蛟龍同矣、則失其所乘也。  
 ●八十一鱗閃。大濤三級間。黃斑而白頰。我敵在南山。  
 ●積水成淵。蛟龍生焉。

るノ部

〔るる〕 流罪。 追放。 邊僻。 左遷。 淪落。 遠流。 孤島。 幽居。 閉門。 流さる。 さすらふ。  
 ●左大臣は御年もわか、才もことの外に劣り給へるにより、右大臣御おぼえことの外におはしましたるに、左大臣安からず思したる程に、さるべきにやおはしけん、右大臣の御ためよからぬ事出でて、昌泰四年正月廿九日、太宰權帥になし奉りて流されたまふ。このおとよの子ども數多おはせしに、女君たちはぞどりし、男君たちは皆ほど／＼につけて位どもおはせしを、これも皆方々に流され給ひてかなしきに、稚くおはしける男君女君たち、慕ひ泣きておはしければ、ちひさきはあへんと、おほやけもゆるさしめ給ひしかば、共にて下り給ひしぞかし。みかどの御おきて極めておやにくにおはしませば、この御子どもを同じ方にだに遣さざりけり。かた／＼にいと悲しく思ひ、御前の梅の花を御らんじ

こちふかばにほひおこせよ梅の花ある  
じなしとて春なわすれそ。

又淳子の御門にきこえさせたまふ。  
流れゆく我はみくづとなりはてぬ君し  
がらみとなりてとよめよ。

なき事により、かく罪せられ給ふな、かし  
こくおぼし歎きて、やがて山崎にて出家せ  
しめ給ひてけり。その程極めて悲しき事お  
ほかり。日比へて都遠くなるまゝに、あは  
れに心ほそくおぼされて、

君がすむやどのこすふをゆく〜とか  
くる〜までもかへり見しかな。

又播磨の國におはしつきて、明石のうまや  
といふ所に、御やどりせしめ給ひて、うまや  
の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作  
らしめ給へる詩、とかなし。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。  
かくて筑紫におはしし着きて、哀に心細  
くおぼさるゝ夕、遠方に所々烟たつを御覽  
じて、

夕されば野にも山にもたつけぶりなげ  
きよりこそえまさりけれ。  
又雲の浮きてたよふを御覽じて、

山わかれとびゆく雲のかへりくるかげ  
見るときぞなほたのまるゝ。

さりとも、世をおぼしめされけるなるべ  
し。月のあかき夜、  
海ならすたよふ水の底までもきよき  
心は月ぞてらさん。

これいとかしこくあそばしたりかし。げに  
月日こそはてらし給はめとこそはあめれ。  
(中略)筑紫におはします所の御門もかため  
ておはします。大貳の居所ははるかなれど  
も、樓の上のかはらなどの、心にもあらず  
御覽じやられけるに、又いと近く觀音寺と  
いふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめし  
て作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓樓看五色。觀音寺只應鐘聲  
これは文集白居易、遺愛寺鐘欲、枕邊。香  
爐峯雪撥簾看といふ詩にも、まささまに  
作らしめ給へりといふ、むかしの博士ども  
は申しけれ。又かの筑紫にて、九月九日菊  
の花を御覽じけるついでに、まだ京におは  
しました時、九月の今宵内裏にて菊の宴あ  
りしに、このおとよ作らしめ給へりける詩  
を御門かしく感じたまひて、御衣たまは  
り給へりしを、筑紫まで下らしめ給へりけ

れば、御覽するに、いとよその折思しめし  
いでよ作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。  
恩賜御衣今在。此。捧持毎日拜餘香。  
この詩いとかしこく人々感じ申されき。(中  
略)又雨ふる日、うちながめ給ひて、  
あめの下かわける程のなればや着て  
しぬれぎぬひるよしなき。

やがてかしこにて失せ給へり。(爲業)  
●さる程に六月二日の日、新大納言成親の  
卿をば、公卿の座に出し奉りて、御物参ら  
せけれども、胸せき雲がりて、御容をだに  
も立てられず。預の武士、難波の次郎經遠、  
御車を寄せて、疾く〜と申しければ、大  
納言心ならずぞ乗り給ふ。あはれ如何にも  
して今一度小松殿に見え奉らばやと思はれ  
けれども、それもかなはず、見過せば、軍  
兵共前後左右に打圍みて、我方さまのもの  
は一人もなし。假令重料聚りて遠國へ行く  
者も、一人の身に添へざるべきことやあ  
ると、車の内にてかきくどかれければ、守  
護の武士共も、皆鐘の袖をぞぬらしける。  
西のしゆじやくを南へ行けば、大内山も今  
はよそにぞ見給ひける。年頃見馴れ奉りし

雑色、牛飼に至るまで、皆涙を流し袖をぬ  
らさぬはなかりけり。まして都に残り止り  
たまふ北の方、幼き人々の心の中、推し量  
られてあはれなり。鳥羽殿を過ぎ給ふにも  
此御所へ御幸なりしには、一度も御供には  
はづれざりしものとて、我山庄洲濱殿と  
てありしを、よそに見てこそ通られけ  
れ。鳥羽の南の門を出で、船運しとぞ急が  
せける。大納言、同じく失はるべくば都近  
き此邊にてもあれかしの給ひけるこそせ  
めてのことなれ。近く添ひ奉りたる武士を、  
誰ぞと問ひ給へば、預の武士難波の次郎經  
遠と名のり申す。若し此邊に我方さまもの  
のやある。一人尋ね参らせよ。船に乗りぬ  
先に、首ひおくべきことありとの給へば、  
經遠その邊りを走り廻りて尋ねけれども、  
我こそ大納言の御方なりと申す者一人もな  
し。その時大納言涙をばら〜と流して、  
さりとも我世にありし時は、従ひつきたり  
し者共、一二十人もありつらん、今はよ  
そにてだに、此有様を見送る者のなかりけ  
る悲しさよとて泣かれければ、猛き武火共  
も、皆鐘の袖をぞぬらしける。只身にそふ  
ものとは、つさせぬ涙ばかりなり。熊野

詣、天王寺詣などには、二つ五三つ棟造り  
なる船にのり、次の船二三十艘、漕ぎつよ  
けてこそありしに、今はけしかるかきすゑ  
屋形船に大審引かせ、見も馴れぬ兵共具  
せられて、今日をかぎりにも都を出で、波路  
はるかに赴かれけん、心の中推しはかられ  
てあはれなり。新大納言は死罪に行はるべ  
かりし人の、流罪に宥められける事は、偏に  
小松殿のやう〜に申されけるによりてな  
り。その日は攝津國大物の浦にぞ着き給  
ふ。明るる三日の日大物の浦へは、京より  
御使ありとてひしめきけり。大納言そこ  
て失へるとにや聞き給へば、さはなくして、  
備前の兒島へ流すべしとの御使なり。又小  
松殿より御文あり。あはれ如何にもして、  
都近き片山里にもおき奉らばやと、さしも  
申しつるそのかなはざりけることこそ、世  
にあるかひも候はね。さりながら御命はか  
りは請ひうけ奉りて候ふぞ。御心安く思召  
され候へとて、難波が許へもよく〜宮仕  
奉れ、相構へて御心にはしたがつな、など  
の給ひ遣し、旅の装細々と沙汰し送られた  
り。新大納言はさしも忝く思し召されつ  
る、君にも離れ参らせ、東の間も去り難く

思はれける、北の方をさなき人々にも皆別  
れはて〜、こは何地へとてゆくらん、再び故  
郷に歸りて、妻子を相見んこともありがた  
し。一年山門の訴訟によりて、已に流され  
しをも君惜ませ給ひて、西の七條より召し  
かへされぬ。されば是は君の御戒にもあら  
ず。こは如何にしつる事どもぞやと、天に  
仰ぎ地に伏して、泣き悲めどもかひぞな  
き。明くれば、船押出して下り給ふに、道  
すがら只涙にのみ咽びて、ながらふべしと  
は覺えねども、さすが露の命はきえやら  
ず。跡の白波隔つれば、都は次第に遠かり、  
日數やう〜重めれば、遠國は既に近づき  
ぬ。備前の兒島にこぎよせて、民の家のあ  
さましげなる、庵に入れ奉る。島のならひ、  
後は山前には海、濱の松風浪の音、何れもあ  
はれはつきせせ。(平家物語)  
●こはいかに罪も同じ罪、醜所も同じ醜所、  
非常も同じ大赦なるに、一人誓ひの綱にも  
れて、沈みはてなん事はいかに。此程は三  
人一所にありつるだに、さも恐ろしく冷ま  
しき、荒磯島にたよ一人、離れて海士の捨  
草の、波の濺屑のよるべもなくて、あられ  
ん物かあさましや、歎くにかひも清の千鳥、

泣くばかりなる有様かな。(謡曲、俊寛)  
 ●かやうに候ふものは、佐渡の島の御家人本間の三郎何某にて候ふ。扱も此度元弘の亂に公家うち負け給ひて候ふ。申にも壬生の大納言資朝の卿は、四人となり此島へ流され給ひて候ふ。某預かり申して候ふ處に、昨日都より飛脚立つて、大事の四人にて御座候ふ程に、誅し申せとの御事にて候ふ間、此山を資朝の卿へ申さばやと存じ候ふ。(謡曲、壇風)

●九大夫真中に進み出で、サアいづれも、鹽治のお家の大事、高下によらず殊な頂戴するものは、勝を聚めて分別所、双方御存命といひながら、折といひ場所といひ、全く殿の誤り、軽くて流罪、重うて切腹、夫を思へば胸にせまつて、智恵分別も中々出ぬ。(浄瑠璃、忠臣講釋)

●時平が方人三巻の清貫、門外に立ちだかり、齊世親王かりや姫、加茂堤より行衛知れず。子細御詮議なされし所、親王を位に即け、娘を后に立てんとする。菅丞相が兼てのたくみ、其罪遠島に相極り、流罪の場所は追つての沙汰、夫迄は押込め置き、出口く大貫すがい、門の警固は身が家

來荒島未税を付け置くと。(浄瑠璃、菅原傳授)  
 ●ゆきたけもきかで流人の拾哉。(蕪村)  
 ●繩を打流罪になるは重い質。(川柳)  
 ●うつくしい流人大めしくらひなり。(同)  
 ●だつ子のやうに俊寛愚痴を云ひ。(同)  
 ●うきふしな、めて配所の竹たるき。(同)  
 ●流人島蛭ツ貝でひげをぬき。(同)  
 ●我從去年辭帝京。騎馬臥病薄陽城。薄陽地僻無音樂。終歲不聞絲竹聲。住近瀛池。地低濕。黃蘆苦竹繞宅生。其間且尋聞何物。杜鵑啼血猿哀鳴。春江花朝秋月夜。往々取酒還獨傾。豈無山歌與村笛。嘔啞嘲嘲雜爲聲。(白居易)  
 ●一封朝奏九重天。夕貶潮州路八千。欲爲聖明除弊事。敢將衰朽惜殘年。雲橫秦嶺家何在。雪擁藍關馬不前。知汝遠來須有意。好收吾骨瘴江邊。(韓愈)  
 ●病人多夢。醫。囚人多夢。赦。如何春來夢。合眼在鄉社。(黃山谷)  
 ●相望六千里。天地隔江山。十書九不到。

何用一開顏。(同)  
 ●冷淡痴心情。喧和好時節。故園音信斷。遠都親實絕。(同)  
 「るり」瑠璃  
 清徹。五色。十種。  
 ●三月十三日に西園寺の舊宅へ還幸なる。是は后妃遊宴の砌、先皇臨幸の地なれば、樓閣玉を鑲めて、客殿雲に聳えたり。丹青を盡せる妙音堂、瑠璃を展べたる法水院、年々に皆あはれて、見しにもあらずなりぬれば、雨を疑ふ岩下の松風、絲を亂せる門前の柳、五柳先生が舊跡、七松居士が幽栖も、かくやと覺えて物まびたり。(太平記)  
 ●二人共に湖水の波を分けて、水中に入ること五十餘町ありて、一の樓門あり。開きて内へ入るに、瑠璃の沙原、玉の盤腹にして、落花自ら繽紛たり。歩樓紫殿玉の欄干、金を鑲にし銀を柱とせり。其壯觀綺麗未嘗て目にも見ず、耳にもきかざりし所なり。(同)  
 ●上人又申すやう、それはまことにさり

き。さりながら猶疑あり。速に凡夫のふるまひに、離れたらん事を、しめし給へと申されければ、この女房とびあがりて、萱屋の棟に尻をかけて坐せり。其顔の色瑠璃の如くに青く透きとほり、口より白き泡をたらし。この泡香しきことかぎりなし。その時上人信仰して、誠にこのやう不可思議なり。年の頃華嚴經の中に不審多かり。悉く解脱し給へと申されければ、御領状ありけり。(成季)

●始皇は雷に怖ぢ給ひければ、雷より上に柄まんとて、阿房の殿をば造られたり。東西へ九町、南北へ五町、高さ三十六丈なり。大床の下には五丈の幢を立て並べたり。庭に金の砂、瑠璃の砂、各十萬石をまき、眞珠の砂、白石を彩らしけり。(源平盛衰記)  
 ●山くれて、寒風松聲に聲立て、時ならぬ雪は降り落ち、山河草木おしなべて、水を敷きて、瑠璃壇に、なると思へば氷室守の、薄氷を踏むと見えて、室の内に入りにけり。(謡曲、氷室)

●扱も我鹽土男の、翁が敷に従ひて、わたつみの都に入りぬ。こゝに瑠璃の瓦を敷ける衛門あり。門前に玉の井あり。此井の有

様、銀色かやき世の常ならず。又ゆづの柱の木あり。木の下に立ち寄り、暫く事よしたも、窺はよと思ひ候ふ。(謡曲、玉井)  
 ●庭の砂は金銀の、玉をつらねて敷妙の、五百重の錦や瑠璃の屏、礎礎の行桁瑠璃の栴、池の汀の樹鶴は、蓬萊山もよそならず。(謡曲、鶴龜)  
 ●げに尤と菊の酒盛、あはびは瑠璃の玉の盃、さいつさふれつ飲め歌へ。三人四人が身の上を、いわうが島も蓬萊の、島にたへて汲め共盡さぬ、泉の酒とぞたのしみける。(浄瑠璃、平家女護島)  
 ●峰は水深き象頭山。麓に靈河漲りて、深淵瑠璃を湛へたり。道なき崖を下りては、金輪際かと過たれ、峻き坂に差懸れば、雲を歩むに異ならず。(浄瑠璃、釋迦如來)  
 ●るりの地に夏のいろをばかへてけり山の、みどりなうつつ池水。(定家)  
 ●くもりなきるりのとびらにさく花はおくれぬかげのいろにぞありける。(殷富門院大輔)  
 ●かげきまきまへのうら木うつりきてるりの扉も花かとぞ見る。(俊成)

●瑠璃琥珀玉に香はなし桃の花。(野坡)  
 ●青雲にまぎれてるりの渡り鳥。(敲水)  
 ●珍らしき瑠璃の蓋にもひとしきは薬師のつとの茄子の初もの。(元家)  
 ●たよたのめねがへばとにもめのうちの佛もるりの光まさまし。(五十瀬のや)  
 ●梅が枝におきぬる露の玉造瑠璃光によつと枝ぞ延びぬる。(貞柳)  
 ●しらす心たれをかうらむ朝がほはたよるり、んのうるほへる露。(赤良)  
 ●瑠璃燈の塵にやたての水きや君はうはへの油ばかりで。(喜泉)  
 ●木下川の薬師の庭のつぼのうら瑠璃の色にぞ咲く杜若。(足成)  
 ●白露をかけてこそ賣れ市人の朝貞顔に瑠璃色の茄子。(不孤亭)  
 ●じやうるりの色なる茄子の初ものは大きもまた一口ばかり。(晴見)  
 ●紫の都に瑠璃の御造營。(川柳)  
 ●瑠璃光に咲く木下川の花ざかり。(同)  
 ●瑠璃紺のぶつさきを着る尿の蠅。(同)  
 ●唇は珊瑚珠齒をば瑠璃に染め。(同)  
 ●瑠璃色もさだかに見えぬ花曇。(同)  
 ●いろはまで花のちりぬる瑠璃の山。(同)

- 瑠璃をかけ玉をみかいて妾に出し。(同)
- 瑠璃色の日傘も出来る樂師前。(同)
- 瑠璃の齒を見せて女房の茄子楊枝。(同)
- さて婚禮の吉日は、縁をまたんの日を選び、送る品物はなに／＼やるな。瑠璃の手箱に珊瑚の櫛笄、玉をのべたる長持に、數も丁度の潔よく。(俗語)
- おん身のすがたよく見れば、伽羅の古木にさもにたり。おん目のうちのすよしさは。瑠璃の壺といひつべし。(同)
- 瑠璃も玻璃も照せば光る。(俚語)
- 瑠璃はもろし。(同)
- 瑠璃をのべたやう。(同)
- 清流沙之絶險、越葱嶺之峻危。於是遊四極、望大壑、歷鍾山、闢燭龍、觀王母、訪仙童、取瑠璃之故華、詔曠世之真工、冀元儀以取象、準三辰以定容。光映日耀、圓成月盈、織綬紈麗、飛塵靡停、灼燭旁燭、表裏相形、凝霜不足方、其潔、澄水不能喻、其清、剛過金石、動搖飛玉、磨之不磷、涅之不濁。

れノ部

- 有色同寒冰。無物隔。穢塵。象筵若不見。堪將對玉人。(元稹)
- 時なりて、大阿闍梨二品法親王道深奥にてわたり給ふ。喜多院の南の門より。上達部殿上人歩み續きてそこら参りつどふ、吉田中納言爲經、二條の中納言忠高、侍從宰相すけする、藤宰相のふしり、左宰相中將されたう、左大辨つねみつ、新宰相定嗣、

- 皆列をひき、受者もみぎりにおりたち給へる。いとわかうつくしうて、地藏菩薩に似給へるを、入道殿いと悲しと見奉り給ふ。紫の袈裟に香爐もちてわたり給へば、もとより並び立てる上達部、皆禮をいたす氣色やんことなく見ゆ。(増鏡)
- 夫婦の中のしたしみも、禮あるうちは珍らかにして、その情至つて深く、又厚し。禮を失ふ時はその情自然と薄くして、離別もまた遠きにあらす。仁義通讓は禮を厚うするの中だちにして、この禮、媚諂と背を合す。智は痴とさしむかひ、誠は嘘と隣る。さあれば心安だてと愛想づかしは、いつも同居としるべきなり。(淇園)
- 貧しき者は財をもて禮とし、老いたる者は力を以て禮とす。おのが分を知りて、及ばざる時は速にやむを智といふべし。許さざらんは人のあやまりなり。(兼好)
- 扱も我君判官殿は、頼朝の御代官として平家を滅ぼし給ひ、御兄弟の御中日月の如く御坐候ふべきを、ゆひがひなきもの、謙言により、御中たがはれ候ふ事、かへす、口惜しき次第にて候ふ。然れども我君親兄の禮を重んじ給ひ、一まづ部を御開きめつ

- て、西國の方へ御下向あり、御身にあやまり無き通りを、御嘆きあるべき爲に。(謡曲、舟辨慶)
- 今夜此所にて、祐經を討ち、我等兄弟空しくならば、さて故郷にまします母には、誰か斯くと申すべきぞ。敬ふものに従ふは、君臣の禮と申すなり。之を聞かずば生々世々、長き世までの勘當と。(謡曲、夜討曾我)
- さすが女房は女房だけ、小袖に手拭紅白粉、楊枝鐵樂筆つど／＼に、妻に心を附やき双。兄の茂松が清書紙、幾折あるか白石の、名代の焼餅、弟が是は土産に貰ひ溜、男が錢百紙包、下女ははつたひ紙袋、胸一杯に涙迄、添へて遣るこそ殊勝なれ。夫婦がつど／＼一禮の、様子見るより筆助は、イヤ私めは只今お國元より参つた家來奴、見受けますればどなたも、云ふ様もな

- り、自ら徳を聖人に比べ、麒麟大王と尊號し、人も許さぬ卿相雲客、浮べる雲の上人時めさける。(淨瑠璃、大友眞島)
- 親を親と思ふひつじのひまにだに見えける道は猶ぞたがはぬ。(爲重)
- 年立や家中の禮は星月夜。(其角)
- むつかしき鳩の禮儀やかん／＼鳥。(蕪村)
- 年禮やあとから來たい時宜ばかり。(塞馬)
- 投げられて禮して遣入る相模取。(立吟)
- 二口にもとく驚かす禮者かな。(五松)
- 君と師と親とかぞふる三つ指の腰もかゝむる禮ぞ正しき。(秀作舎)
- 紋付けし小袖を着つゝ冬はかけ夏はひなたへ道よくる禮。(水丸)
- おだやかにたのみせくの禮儀とてくばるはつほののけに手もつく。(唯澄)
- ひいとふたみつのあしたに羽根ならではご板橋でやりはごの禮。(推丸)
- 夏籠の日數みつれば冬に又顔出をする中の禮。(相丸)
- 鳩ならでほねもさんしの十二本あぶさはさすが禮なるもの。(可々志)

- 咲く梅の門禮者をばとり次いでそよふくこちへお通し申せ。(下長)
- 葉たばこを給はりたりし御禮は費面のきざみ申すべく候。(貞安)
- 跡を追ふ子はさもなくや、笑ふ梅が香する年禮の袖。(見分)
- 年玉は一月先に風の絲のいとのがて來る女禮かな。(萬葉守)
- 朝みどり柳の絲のたれ／＼もよりにほもどる春の門禮。(三字守)
- 年よりを乞へるはおのが親島におくれし後の禮にや有るらん。(三寸丸)
- もく禮に手を打つたのは久しぶり。(川柳)
- 馬の糞案山子へ禮をのべて喰い。(同)
- おッペしよるやうに馬上の禮を受け。(同)
- 現在の親のかたきに五分禮。(同)
- 紙の禮もむと其角が話なり。(同)
- 七くさが過ぎては禮もひやうしわけ。(同)
- 嫁の禮御袋ばかりしやべりわき。(同)
- 年禮は喰ふやくりりをして歩行き。(同)

●借金に春水にして禮に来る。(同)  
 ●門禮に道ツ手のかゝる中のよき。(同)  
 ●下月の禮者に消炭をぶんまける。(同)  
 ●鄰へも柿子の禮に其満ふき。(同)  
 ●衣食足りて禮節を知る。(禮語)  
 ●親しき中にも禮儀あり。(同)  
 ●禮過ぐれば詔諫となる。(同)  
 ●神は非禮を受けず。(同)  
 ●嗚呼有禮之不知禮也。其言曰、聖人化性而起爲、吾是以知其不知禮也。知禮者貴乎知禮之意、而禮節盛稱其法度節奏之美、至於官化、則以爲僞也。亦鳥知禮之意哉。故禮始於天而成於人、知天而不知人則野、知人而不知天則僞。野人惡其野、而疾其僞。以是禮興焉。今有朝以朝、聖人之化性而起爲、則是不知天之過也。然彼亦有見而云爾。凡爲禮者必謂其放傲之心、遂其嗜慾之性、其不欲遠、而爲尊者勞、莫不欲得、而爲長者讓。擊鼓曲等、以見其恭、夫民之於此、豈皆有樂之心哉。愚上之惡已而隨之以刑也。故有朝以爲特劫之法度之威、而爲之於外爾。此亦不思之過也。夫與水而爲之器、取馬而爲之駕、

此非生而能者也。故必削之以斧斤、直之以繩墨、圓之以規、而方之以矩、束之以繩、漆之、而後器適於用焉。前之以街、勸之制、後之以繩策之威、馳驟舒疾、無得自放、而聽於人、而後馬適於駕焉。由是觀之、莫不劫之於外、而服之以力者也。然聖人捨木而不爲器、捨馬而不爲駕者、固亦因其天資之材也。今人生而有嚴父愛母之心、聖人因其性之慈、而爲之制焉。故其制雖有以強人、而乃以順其性之慈也。聖人苟不爲之禮、則天下豈將有慢其父、而疾其母者矣。此亦可謂失其性也。得性者、以爲僞、則失其性者、乃可以爲眞乎。此有朝之所以爲不忠也。夫狙猿之形、非不若人也。欲繩之以尊卑、而節之以揖讓、則彼有趨於深山大麓、而走耳。雖畏之以威、而馴之以化、其可服耶。以謂天性無是而可以化之使爲耶。則狙猿亦可使爲禮矣。故曰禮始於天、而成於人、天則無是而人欲爲之者、舉天下之物、吾蓋未之見也。(王安石)  
 ●禮者貴賤有等、長幼有差、貧富輕重皆有稱者也。(荀子)

●禮者所以正身也。(同)  
 ●非禮勿視。非禮勿聽。非禮勿動。(論語)  
 ●生事之以禮。死葬之以禮。祭之以禮。(同)  
 ●禮與其奢也寧儉。(同)

ろノ部

●る 船  
 船。柔船。船聲。搖船。波をわくる。おす。  
 ●る程に、渡邊には東國の大名小名寄り合ひて、抑我等船軍のさまは、未訓練せず、如何せんと評定す。梶原進み出で、

今度の船には、逆轉を立て候はよやと申す。判官逆轉とは何ぞ。梶原馬は駈けんと思へばかけ、引かんと思へば引き、弓手へもめ手へも廻し易く候ふが、船はさやうの時、屹度押し道すが大事にて候へば、船邊に轉をたらかへ、麻柁を入れて、どなたへも廻し易き様に候はよやと申しければ、判官先門出の悪しきよ、軍には一引もひかじと思ふだにあはひ悪しければ、引くは常のならひなり。まして左様に逃げ殺しなんに、なじかはよかるべき。梶原の船には、逆轉をも、かへさま轉をも、百丁千丁も立てたまへ。義經は只元の船にて候はんと宣へば、梶原取れて、よき大將軍と申すは、駈くべき所をもち、引くべき所をも引き身を全くして敵を亡すを以て、よき大將とはしたる候。左様に片趣なるをば、猪武者とて、よきにはせずとこそ申せ。判官、猪のしゝ鹿のしゝは知らず、軍は只ひらぎめに攻めて、勝ちたるぞ心地はよきと宣へば、東國の大名小名、梶原に畏れて、高くは笑はれども、目ひき鼻ひきさよめきあへり。(平家物語)

下す、柴舟に飛びのつて、みづから櫓を取り押切つて、南の方へ赴きたり。われ彼人とふべき事も、いはまほしきとさああるを、あの儘にして別れなば、復遣はんこと難かるべし。舟子等にとくいひつけて、件の舟を追はしてたべ。われも伴舟に力を盡せん。やよとくといそがせば、依介はこゝろえて、やうやくに身を起したる、舟子等を見かへりて、皆の衆よ、今きかると如く、この耶公は日ごろより、和主達にも噂をしたる、彼行徳の犬田の大人なり。今朝未明より故ありて、仇に追はれ友を逐うてうちわたりをし給ひつ。思ひがけなくわが船に、のせ進らせしは幸ならずや。今より些し先の程、南の方へ赴きたる、柴舟のあるぞとよ、こゝでは見えすなりたれども、皆骨折らば追ひもや着かん。食糧をもしね、やよ喃と、辞せはしくいそがしたて、みづから櫓を取りしかば、舟子等は犬田の二字にいよ、驚き、ますく、怕れて、誰かふたよび異議すべき。われは、この春より、大江屋に在るものどもなれば、さる兄之公とはしらすして、いたく無禮を仕りぬ。免させ給へとうちわびて、ひとしく

櫓を推し櫓を操り、聲を合して漕ぐ程に、然らでも流るゝくだり船の、漕はいとはやく、追風はなし。瞬間に一二里ばかり、品川澳も見るまでに、南をさして追はせしかども、件の舟の往方もしれず、後よりは亦わが船を、追ひくる敵もなかりけり。(馬琴)  
 ●日のうらゝかななるに、海の面のいみじうのどかに、淺緑のうちたるを、引き渡したるやうに見えて、聊恐しき気色もなき若き女の泊ばかり着たる。侍の者の老やかなる諸共に櫓といふもの押して、歌をいみじううたひたる、いとなかしうやんごとなき人にも見せ奉らまほしう思ひいくに、風いたく吹き、海のおもてのたよあれにあしうなるに、物もおぼえず、泊るべき所に漕ぎつくるほど、船に浪のかげたるさまなどは、さばかり和かりつる海とも見えすかし。(清少納言)  
 ●此様に袖先から櫓へ向けて櫓を立つる。是を逆櫓といふわいのう。總じて陸の戦は、敵も味方も馬上の働き、かけんと思へば駈け、引かんと思へば引くことも、自由に見ゆれども、船といふものは又格別、知つての通り汐につれ風にさそはれ、船拍

すたて、押す時は、行く事も早けれど、乗り戻さんと思ふ時は、おもむきと相の風波を考へ、取替つかの手の内、船をぐるりと本の如く、押し廻して清き戻す、それさへさすひく沙にもちかうて、船に過る時は、八萬那落の憂き目を見、いとしかは、婁子に、再び逢はれぬぢやないか。

(浄瑠璃、盛衰記)

●海澄花と南は唐土迄と果しなく、いとま浜間のおま小舟、浦の洲崎に立つ浜とつれて、はんまら鳥の友呼ぶ處に、鳥影よりし船の音が、からり、ろり、く、からん、ろりと、漕ぎ出で。 (浄瑠璃、忠臣討刀)

●船もおさで風にまかすあまふねのいづれのかたによらんとすらん。 (和泉式部)

●しほぢゆくか、このともしろ、こゝろせよまたうづはやせを渡るなり。 (西行)

●小夜ふけて、さらにかららのおとすなりあまの月わたるかりにやあるらん。 (匡房)

●室の月や舟のまやの夕なぎにからるに、響く、いその松風。 (信光)

●もろ、このなみちや過ぎしあきの雁雲井にきてもからるおすなり。 (俊成)

●かつしかの真間の浦利のたきつとにわけ

のそばふねからるおすなり。 (俊賴)

●よの中を恨みて、ぐる高瀬舟、うちをへてからるおすなり。 (同)

●船聲波を打つて、馬氷る夜や涙。 (芭蕉)

●月見舟、船繩されたる笑かな。 (雨色)

●櫂を肩に行くもの、みても松涼し。 (道彦)

●船拍子や、荷葉若葉の山がいで。 (四月)

●櫂の聲も、馴れた拍子や花の晴。 (同)

●杜鵑道ふらん五十三掛籠。 (作者不知)

●あれ、く、と船からはづれて郭公。 (其角)

●こしもとは、隠居の足を船にかまへ。 (川柳)

●たから船逆船にして、同じ歌。 (同)

●大根舟、乳おるしに船のたゆみ。 (同)

●名代の新造させる船にかまへ。 (同)

●すり出しは、船を押すやうに髪を漕ぎ。 (同)

●八島落、御座船の船も蟹の足。 (同)

●中利の池におさ舟に、船のしぎ。 (同)

●逆船の遺恨、越て押戻し。 (同)

●逆船の意、越てぬ衣を着せ申し。 (同)

●のぼり夜舟は、かみや櫂ちやとて、櫂音つたへ、佐田やひらかた遊、水に車はくる

くと伏見、つくへ。 (俗語)

●船頭可愛や、櫂戸の瀬戸で、一丈五口の櫂がしわる。 (同)

●ゆぶねひきだす、船櫂の音に、雉子なきたつ、軒端も近し。 (同)

●竿が三年、船が三月。 (俚諺)

●船頭の一時、船。 (同)

●船櫂のた、海はなし。 (同)

●城門朝開、踏踏水、入語、櫂中、近魚市。 (同)

●誰か、飛鶴、入、苔、注、帯、夢、驚、鳥、柳、邊、起、過、處、寒、波、動、拍、沙、遠、聞、嘯、札、復、呼、嘯、征、夫、車、轉、山、頭、阪、工、女、機、鳴、竹、外、家、我、身、本、是、江、湖、客、偶、隨、黃、屋、曉、行、役、此、聲、空、憶、舊、曾、聽、舟、中、酒、醒、東、方、白、 (高啓)

●靜夜有、舟下、中流聞、船聲、隔、聽、燈、已、暗、卷、幔、月、微、明、漸、向、寒、湖、遠、遙、應、宿、枕、驚、客、心、何、苦、急、曾、是、不、綠、名、 (梅堯臣)

●海風打、船船腹穿、東兒、慣、馬、不、慣、船、前、設、順、纜、欲、送、轉、公、唯、直、前、是、藉、武、猪、邪、那、邪、君、髮、疑、爲、鬼、爲、賊、君、未、知、 (山陽)

●一雙、柔、纒、下、秋、潭、嘯、吼、聲、中、雨、意、酣、攪、破、高、查、獨、夜、夢、誤、聞、雁、語、宿、淮、南、 (同)

「ろくぐわつ」六月

季夏。晩夏。林鐘。極暑。季月。

旦月。鶉火。積陽。炎陽。長夏。

みなつき。なる雷月。風まち月。

とこなつ月。いすくれ月。

●五月雨の晴間なき空も、いつしか名残なくなりて、雲の峯立ち重なり、いみじき金岡が手にし、かうやうにはたくみ得難う、楫の聲の響かしがましと、枕上うらさけれど、實にや里のかたへの、こほくと鳴る唐臼の音とはや、變りたり。垣根に咲ける夏草の花よりも、猶もさやかなる池といへど、温にそまぬ蓮の花つけたるばかり、心も清まる事はあらじかし。同じ花紅葉し、人により心によりて、かすまへられしものすれど、わきて佛の御足膝のもとに仕う奉り、或はいきとし生ける人草も、皆このやどり願はぬものやはあらぬ。昔ありける菅原の大臣は、青蓮華入、夢拜、佛座、金蓮と作り給ひしぞかし。夕ばえ猶ありがたう、端居涼しう思ひ取りて、やうやく短衣といへど、夜の更くる間は程久しき

に、水雞のけしからず叩くは、誰が門さし

てと、餘所の月さし思ひやり深う、枕とて草ひき結びうち寝るに、はや夜も明けぬ。

●閑伽奉り花たうべんと、目すり、うらうら向へて、昨日の空には気色かはり、雲うちおほひ、大方は藤の色めきたり。心なき空といへど、かゝる色はいみじう覺ゆるに、神ことん、しう鳴り、おどろくしう鳴りはためきて、光君の西の海にさすらひしを、こゝの例おぼえて、昔物語なつかしう思ふに、程なく神二つ三つおちねべし。 (長明)

●水無月のいとあつき日は、昔見るも物うく、あそびどもすさまじくて、やくとは扇うちつかひて、早もくくれなんと、思ひつゝをるに、やう、夕ぐれになれば、湯あみし、汗にぬれぬ衣さかへなどして、宿を立出て川の堤をゆく。 (高尙)

●水無月のあつさのけふ、ことにさめがたければ、いざ隅田の川風に扇やすめばやと、半込といへる所より、舟出してまづ涼し。 (也有)

●袖ひちて、結びし水の氷れるを、春立つ今日の風や解くらんとよみたれば、夜の間に来る春にだに、氷は消ゆる習なり。まし

てや春過ぎ夏たけて、早水無月になるまで、消えぬ雪の薄氷、供御の力にあらでは、如何でか残る雪ならん。 (謡曲、氷室)

●頃は水無月十三夜、人は何とか夕立の、空さりげなき月影と、俱に命の短夜を、涙に伏見小栗栖の、里の目目を忍ばんと、かくも鐘を脱ぎ棄て給ひ、落ち行く夜半の村隠れ、頼む木影の隙よりも、ヤレ落武者遊すなと、心なき土民共、弓手の脇より突きかくる。 (浄瑠璃、物草太郎)

●師直開いた口閉がれしせず、うつとりと、主従顔を見合せて、氣拔の様にきよるりつと、祭の延びた六月の、晦日見るが如くに、手持無沙汰に見えにける。 (浄瑠璃、忠臣蔵)

●水無月はふきくる風もまれなれどまづけきまどお心すし。 (光俊)

●水無月のてる日のつちの我のみとありの通ひぢゆきちがふなり。 (行家)

●菟りゆくまはせの山のくまつとらくる、し長き水無月のそら。 (家真)

●水無月の土さへさけててる日にもわが袖ひめや妹にあはす。 (人麿)

●わたの原とよさかのぼる朝日このみかけ



- かしのきみな月のそら。(真淵)
- 六月のてる日にかれてふみわたるさよれしあつき夏の山川。(蘆庵)
- 風をのみしたしき友とたのみつゝあやなく暮すみなつきの空。(筑波子)
- みな月のてる日もよそにへだてたる茂木がしとの庵すよし。(たみ子)
- いたづらにおふの麻のは取りしで今年もたけぬみな月の空。(爲家)
- 露に啼くや六月杜宇。(其角)
- 六月や刀拭き居る影滞き。(蘭更)
- 新芋に先づ六月の月見哉。(几童)
- 六月や沼の小草になく菫。(茶静)
- 水無月や田風通不佐波の海。(櫻真)
- 六月や粟に雲置く嵐山。(芭蕉)
- 六月の汗拭ひ居る空哉。(越人)
- 六月や白を乾さうぞ搦白を。(鬼貫)
- 六月の埋火ひとつ静なり。(曉台)
- 六月にろくな月夜もなかりけり。(一茶)
- 柱屏ふきとる風の涼しさはそも六月かそも七月か。(岸積)
- 水無月の時したがへず庭しに釣がわ草のなりよくしき。(下柴)
- みな月のてる日のうさもたらちねを笠に

- きたりし昔戀しき。(橘洲)
- 水無月の照りつくころはたえとくに聲も老いゆくぐひすの瀧。(春繁)
- みな月の天王まつりとくせなん世にあらがねの時疫やらひに。(米人)
- 年代記雨めん染めの夏衣六月雪のはだへ見えすく。(舟主)
- ふたとりてまりほどありとみな月にてるこそなし室の白雪。(舛隅)
- 六月はほしいなくらひ水のみ。(川柳)
- 六月の布子は天へもうちつと。(同)
- 水無月の献上鯉の片身也。(同)
- 六月の朔日雪と炭が出る。(同)
- 六月は鈴あり五月無鈴賣り。(同)
- 六月はひや／＼思ふ御献上。(同)
- 六月は其日歸りの内裏ひな。(同)
- 水無月に梅につもつた雪がちり。(同)
- 六月上旬てつべんへ旅をする。(同)
- 蚤の五月蚊の六月。(狸証)
- 六月蟬の泣き別れ。(同)
- 六月英渠正盛時。重船長記醉題詩。世間光景元無盡。霜落荷枯又一奇。(陸游)
- 小泛西湖六月船。々中人即水中仙。外鋪雲錦千弓地。中度瑤瑤百指天。(楊誠齋)

- 六月西湖錦繡纏。千層翠蓋萬紅粧。都將月露清涼氣。併作侵晨一噴香。(同)
- 六月秦淮氣自涼。八簾敞受午風長。楸枰書靜無人語。堂背翠雲綠樹光。(紀映鐘)
- 六月樹々。戎車既飭。四牡々々。載是常服。獵猶孔熾。我是用念。王于出征。以匡王國。(詩經)
- 江南季夏天。身熱汗如泉。蚊蚋成雷澤。濯髮作水田。(范擘)
- 鳥啼花笑四時好。几淨窗明六月寒。(劉宰)

わノ部

車輪。半輪。一輪。圓輪。孤輪。

曲輪。宛轉。回轉。

- 輪にせんとて人のふきいでたる烟を、なかしくまどかにいくつしつらなりあがるを見て、我もなじかはあやまん、いとよくしてん、見給へなどあらがひつゝ吹き出したるに、あやしうみだれぬる、心うがりて、この度はいかでと、口つきいたうつくろひ心したるが、又ふきそこなひたる、いとむとくなり。(宣長)
- たとへば車を敷へて、これは輪なり、是は軸なり、是は軾なり、是は轆なり、輪をもて車とすべからず、軸をもて車とすべからず、軾をもて車とすべからずとて、輪をすて軸をすて、軾をすて轆をすて、見たれば、車もともになくなりけり。(感業)
- まづさしおたりたる目の前の事にのみまぎれて、月日をおくれれば、ことごとくになす事なくして身は老いぬ。終にもの上手にもならず、思ひしやうに身をも持たず、悔ゆれども取りかへさるゝ齡ならねば、走りて坂をくだる輪のごとくに衰へゆく。(兼好)
- 生死は車の輪の如くにして、はじまりて

- はをばり、終りてははじまり、いつなはじり、いつなをばりといふ事あるべからず。(忠親)
- 蓬の車におしひしがれたるが、輪のまひたちたるに、おきあがりて近うかゝへたる香もいとをかし。(清少納言)
- 水無月の、名越の祓する人は、千年の命延ぶとこそ聞け。輪は越えたり。御祓の此輪をば越えたり。真如の月の輪の明を、知らで人な笑ひそよ。よ。悪しき友あらば、拂ひのけて交らん。身に拂ひのけて交らん。輪越えさせ給へや。此輪を越えさせ給へや、名を得てこそぞ加茂の宮に、参らせ給はよ、御祓の河より此輪を先づ越えて、身をも清め給へや。千早振神の費垣も越えつべし。もと來し方の道を尋ねて迷ふ事はなくとも、異方な通り給ひそよ、今日は名越の輪を越えてまわり給へや。(謡曲、水無月祓)
- 人にくちてはなれて桶の輪のわかれ／＼になるぞすべなき。(言道)
- 池の宮見えてはきゆるちよのわの亂れ重ねにふる時雨哉。(同)
- いたづらに今年もなばめぐる輪のわけん方なき身の輪哉。(景樹)

- 年月のめぐりくるまの輪になりて思へばかゝるなりもありけり。(道綱世)
- 初真桑四ツにやわらん輪にやせん。(芭蕉)
- 輪に結ぶ梅をわけたる月夜哉。(嵐雪)
- 長い夜を輪にして明すをどり哉。(也有)
- 影みどり萩は輪になる風狂ひ。(野坡)
- 桶の輪やきれて啼きやむ蟋蟀。(昌房)
- 露の輪の崩れて入るや山櫻。(文章)
- 初空やたばこ吹く輪の中の比叡。(言水)
- 虹の輪の真只中やまじの聲。(梅玉)
- 山雀の輪移しながら渡りけり。(一茶)
- 鶴の輪に冬長閑なる野かけ哉。(五明)
- 草の輪ともなりてはあめならぬ盆のなごりのふりやみすらん。(唯澄)
- やみなればまのぶといふも空事かまたてらされて嘘やつきの輪。(存賢)
- から白の棹としぐれの櫻の木米搦虫よふむな月の輪。(可名)
- 己が身のおるかもしふははらひたし神のみ前のちの輪くよりて。(縫方)
- ひとりかけふたりかけたる桶の輪のたが／＼けらんあすの日は又。(高波)
- 風の手にかゝれるくまを退治して見る月

- 輪や秋のまきかり。 (千年)
- 月の輪も曇るばかりに梅れじてたとへまけたと朧なつぷしそ。 (しんこ)
- 山がらのわたれる秋のあすくとやけふ諸人のちの輪くよれる。 (戯雄)
- 御被には茅の輪をりかけ川社秋は紅葉の水をくよれり。 (伴雄)
- 雁がねの渡る比しも切る竹は竿にもなりつ又輪にも成る。 (耕夫)
- 指に輪をかけたかと啼く其聲に血や出でぬらん山時鳥。 (仲人)
- 水茶やへ来ては輪をふき日をくらし。 (川柳)
- 輪をふくの稽古で禿目を廻し。 (同)
- ねだられて禿にやりし烟の輪。 (同)
- 輪をふやすやうに景清しはられる。 (同)
- 輪にたらぬ片山里の盆をどり。 (同)
- 輪違ひの神魂安南の相戦死。 (同)
- 智恵の輪のやうな木具屋軒へ干し。 (同)
- 天地を巡る月日も車の輪。 (同)
- みの輪から曲り曲つた輪へ道入り。 (同)

- はらひ見る晦口芽の輪で帳を消し。 (同)
- 千代の色、かはらぬ空とみづぐきや、かよひくるわの輪の内、ならぬ矢はずのもんそれよ。 (俗論)
- おなたへなびげば、あなたの恨、思ひとひと車のく、雨の輪になる、くるく。 (同)
- 人はわるない我身がわるい、破車で輪がわるい。 (同)
- 因果は車の輪、今は錢の輪。 (俚諺)
- 宛轉復宛轉、宛轉日幾回、君腸鹿鹿斷、我腸車輪摧。 (高啓)
- 抖擻垢袂衣、度脱生死輪。 (白居易)

「わかぬ」若菜

● 垣はの梅心もとなくつぼみ、まだおく霜深く、あしたの程は、冬めき寒き初春の比も、よく晴れたる日のさしのぼりては、空の景色うららかに、人の心ものびらか

なれば、火桶のあたり離れて、立ちいでんと思ふ心のつきて、いざや子等、雪消の野への若菜つみてんとて、女の童に、かたみ引きさせ、ふぐしやうの物もたせて、ゆきて見るに、思ひしもあるく、若やかに色づきそめたるが、古草の枯葉の下に見えたるは、いとく珍らし。 (高尙)

● 人の家の池と名あるところより、鯉はなきて、鮎よりはじめて、川のも、海のも、ことものも、長櫃になひつよけておこせたり。若菜こに入れて、雉など花につけたり。わかぬぞけふを知らせたる。歌ありそのうた、

あさぢふの野べにあれば水もなき池につみつるわかぬなりけり。

いとをかし。この池といふは所の名なり。よき人の男につきて、くだりて住みけるなり。 (貫之)

● 若菜摘む生田の小野の朝風に、猶さえかへる袂かな。木の芽も春の淡雪に、森の下草なほ寒し。深山には松の雪だに消えなくに、都は野への若菜摘む、頃にも今はなりぬらん、思ひやるこそゆかしけれ。こゝは又もとより所も天さがる、鄙人なればおの

づから、憂き命の生田の海、身を限りにて憂き業の、春としもなき小野に出で、若菜摘む、いく里人の跡ならん、雪間あまたに野はなりぬ。道なしとても踏み分けて、野澤の若菜今日も摘まん。雪間を待つならば、若菜もしや老いしせん。風吹く森の木陰、小野の雪も猶さえて、春としも七草の、生田の若菜摘まうよ。

(謡曲、求塚)

● 君がため、春の野に出で、若菜摘む、衣手さむし消え残る、雪ながら摘まうよ、淡雪ながら摘まうよ。澤邊なる、ひこりは薄く残れども、水の深岸かき分けて、青緑色ながらいざや摘まうよ。また初春の若菜には、さのみに種は如何ならん、春立ちて、あしたの原の雪みれば、まだ舊年の心地して、今年生は少し、古葉の若菜摘まうよ。古葉なれどもすがすがし、年若草の種なれや。心せよ春の野邊春の野に、蘆摘みにと來し人の、若菜の葉や摘みし、實にやゆかりの名をとめて、袂背の橋も中絶えし。佐野の聖たち若だちて、緑の色も名にぞ染む、長安のなづな、しるみ草も有明の、雪にまぎれて、摘みかぬるまで春さむ

き、小野の朝風まだ、森のしづえ松垂れて、いづれを春とは白波の、河風までもさかへり。吹かる、秋も猶寒し。摘み残して歸らん、若菜摘み残し歸らん。 (同)

● いとしかはゆき方機に、見放されんも白露の葉末に結ぶうき身ぞや。ホニお前ゆゑなら、ねの日の若菜君が爲め、惜からざりし命の中、我せたいをせわやかは、婿しは山々、二つには又母様へ、及ばずながら朝顔の、夢計りなる御孝行、それさへ捨て、行かうとは。 (淨瑠璃、忠臣蔵)

● 腰元の名も青柳の柳腰、のこの月を妾見の野邊にさえたが、朝けはひもすそほら行く跡に、ふりかたげたる茶辨當、花毛鹿の紅も、圍生に植ゑて隠れなき、御姫様よりこの奴、ならびなん、七くさの、拍子とり、御主人の、機嫌笑顔や打連れ立ち、桃山さして行く野邊に、木々若葉の色見えて、君と連理の枝高く、ひよくの契とり、の、なれが兼覺をさそひ來る風に亂れし玉くしげ、うつりなつかしゆかしやと。 (淨瑠璃、三日太平記)

● 野へ見ればわかぬつみけり、べし、そ垣ねの草も春めきにけれ。 (貫之)

- 春日野はゆきのみつむと見しかどもおひ出づるものは若菜なりけり。 (和泉式部)
- 春くれば千代ふるみちふみわけて誰せり川に若菜つむらん。 (家隆)
- あたらしく春くることに故郷のかすがの野べに若菜をぞつむ。 (能宣)
- 春雨にうるふわかぬなをつみければ歸るさまにも色ぞまされる。 (契沖)
- 筑波の雪にぬるゝ乙女子がすそはのため若なつまばや。 (千蔭)
- つめばかつ千代のためしうれしきも秋にあまるわか菜なりけり。 (春海)
- ゆきまなきかたやたづねんみな人の摘みて残さぬ野邊のわか菜は。 (宣長)
- つむことのかたみの若菜ををさへなしとや雪の降りかくすらん。 (蘆庵)
- これぞこのいく田のなの、いく樂老さへしらぬ若なつみてん。 (長流)
- 草薺にけふは賣りかつ若菜かな。 (芭蕉)
- 初市や雪に消ぎ來る若菜舟。 (風蘭)
- うかれ雀妻よぶ里の朝若菜。 (其角)
- 雪の戸や若菜ばかりの道ひとつ。 (言水)
- 初若菜鯉も切るべき日なりけり。 (曉台)
- 小わらばの物は買ひまき若菜哉。 (名波)

●まないたの七野に響く若菜哉。(几董)  
 ●若菜吹く風や提げ行く馬の脊。(乙二)  
 ●心なのぞく／＼きりや初若菜。(成美)  
 ●背し／＼若菜は背しゆきの原。(米山)  
 ●祝の爲春の野に出て若菜つむ雪の寒さも  
 孝行天鳥。(三陀羅法師)  
 ●春の日の光る源氏の若菜とてから描なら  
 ぬ爪もあてけり。(真垂)  
 ●驚はなげども雪にわけてつむ妹にかさな  
 い梅の花笠。(東作)  
 ●からなづな若菜かたみに打交せて摘みて  
 きたの／＼菅家萬葉。(めしもり)  
 ●三文の若菜も雪のたかねにて七十二文棒  
 ぞふりつ。(あから)  
 ●むさし野は廣さんとの地性にてかたの  
 はるとも若菜摘まばや。(嘉和種)  
 ●爪のたつちもなき今のむさし野は背物店  
 に若菜つむなり。(松影)  
 ●はし鷹のしらふの雪間たづねつゝしるし  
 のすゝな一つかみつむ。(三笑)  
 ●しら雪をわけてつまなん下駄のはの二葉  
 の若菜はきとみえねど。(一村)  
 ●白雲にまた埋火のひのなをばかきさがし  
 つゝあたりにぞ摘む。(長房)

●若菜と小松狩衣が二度よこれ。(川柳)  
 ●君が爲若菜屋へ張る仕舞禮。(同)  
 ●紫女彦左若菜文武へ来り。(同)  
 ●雪中の若菜も孝の御製なり。(同)  
 ●秋の田や若菜を作る安い公家。(同)  
 ●若菜屋でつむ藁籠も君が爲め。(同)  
 ●日影のどけき春日野に、若菜つみつゝ萬  
 代を、祝ふ心の道すぐに、神のめぐみを祈  
 らん。(俗語)  
 ●わかなつむとて袖引きつれて、思ふ友ど  
 ちよい中／＼、中のよいのをわきから見れ  
 ば、どれが姉やら妹やら。(同)  
 ●夢回聞雨聲、喜我菜甲長。平明江路濕。  
 並岸飛雨聲。天公眞富有。乳背瀉黃壤。  
 霜根一著滋。風葉漸俯仰。未任篋宮職。  
 己作盃盤想。艱難生理學。一味敢專學。  
 小摘飯山僧。清安寄眞賞。芥藍如南菓。  
 脆美牙頰響。白松類魚豚。胃土出鱗鱗。  
 誰能視火候。小童當自養。(蘇東坡)  
 ●夏山宿根已生葉。韭芽戴土拳如戲。  
 烟飛香齊白魚肥。碎點青蒿涼餅滑。宿  
 酒初消春睡起。細履幽畦撥芳辣。齒陳甘菊  
 不負渠。繪幾堆盤幾手採。北方若菜今  
 未已。雪底波殘如鉄甲。豈知吾蜀富冬

蔬。霜葉露牙寒更萬。久抛松菊猶細事。  
 昔荷江豚那忍說。明年投効須須歸。莫  
 待齒搖併髮脫。(同)  
 ●野中毛菜世事推之蕙心。爐下知幾俗  
 人風之蕙指。(管公)  
 ●雪圃乍開紅菜甲。綠縷新剪綠楊絲。(董莊)  
 「わかば」若菜  
 新緑。翠綠。清鮮。碧葉。嫩葉。  
 涼陰。滿庭。  
 みどりのわかば。木々のみどり。  
 しげき梢。茂る木かげ。青葉山。  
 すゞしきかげ。  
 ●そばの木、はしたなき心地すれども、花  
 の木ども散りはて、おしなべたる緑にな  
 りたる中に、時もわかず、濃さもみぢのつ  
 やめきて、おもひかけの青葉の中よりさし  
 出でたる珍し。楓の木さ／＼やかなるにも、萌  
 え出でたる梢のあかみて、おなじかたにさ  
 し廣がりたる葉のさま、花もいと物はかな  
 げにて、蟲などのかれたるやうにてをか  
 し。(清少納言)  
 ●片岡のこのむかつをに椎まかばといひし  
 古ことを思ふにも、げに夏は木陰こそ、さ

るからにいとつかしくて、卯月来れば、  
 青やかに茂れるが、まづ目につきてなまめ  
 かしう見ゆかし。まして村雨の名残の夕露  
 にぬれたるは、ひとときはうつくしきに、暮  
 れはてはなをかしき程なるとうろの光に。  
 淺緑の若菜の色のいとく見ゆるも、又い  
 はんかたなし。(高尙)  
 ●若みどり枝さしかはす常磐木も、や／＼し  
 げりあひたるに、つゝじ、やまぶきの花も  
 ささのこりて、さながら顔なわくるやうな  
 り。(遊女大橋)  
 ●こゝは何處ぞ舊年の、木の葉も積る井  
 川、しばしながらの旅心、蘆の若葉のなこ  
 はしみ、風も音せてよる波の、響きはさす  
 が聞きて戀ふ。難波の浦のうら／＼なる、春  
 のけしきを今ぞ見ん。(話曲、梅)  
 ●ちりはてしきくらが枝にさしませて盛と  
 みするわか楓かな。(爲家)  
 ●春かけてはさき色づくわか楓さしあらし  
 しななに急ぐらん。(信實)  
 ●わか楓あなきひとへにくれなぬの袴と見  
 ゆる岩つゝじかな。(慈鎮)  
 ●かげひたす水さへいろぞ緑なるよしの梢  
 のおなじわか葉に。(定家)

●梅園わか葉のかぜもかをりきて夏もよし  
 ある背りなりけり。(千蔭)  
 ●ちるはなのうきて流れしなごりにはうつ  
 る若葉もかげかならん。(同)  
 ●春花をまちしばかりはまちもみ木々の  
 若葉のいつしげりけん。(枝直)  
 ●夏山やきのふの花の雪きえて若葉に匂ふ  
 あさ日かげかな。(春海)  
 ●さくらこそなほみやられるこの色とわか  
 め若葉も花のなごりに。(宣長)  
 ●ほのみゆるかげもあなみて若葉さすかへ  
 での梢月ぞをぐらき。(蘆庵)  
 ●葎門は緑の若葉かな。(芭蕉)  
 ●若菜吹く風や煙草の刻みよし。(風雪)  
 ●若菜吹くさ／＼と雨乍ら。(惟然)  
 ●年寒し若菜の雲の朝朝。(其角)  
 ●淺間山煙の中の若葉かな。(蘇村)  
 ●院々の露のけぶりか谷若葉。(旨原)  
 ●水音も若葉も木曾の日々／＼に。(召波)  
 ●渾半重なる青葉若葉かな。(曉台)  
 ●老淋し若葉の花をさがす杖。(杉風)  
 ●夕暮の蟬眠になりたる若葉かな。(養太)  
 ●出替りて花は若葉となる中にもりに残る  
 はうば櫻のみ。(澄丸)

●若葉する木下のかげはまくらごと袖もま  
 どろむかひの夢山。(綾人)  
 ●桃櫻花のけもなく毛だらけのけ虫うるさ  
 き若葉する頃。(洞佳)  
 ●山のこしみれば若葉のさしもぐさまげり  
 てあつき夏のひほとり。(由良人)  
 ●梅さくらなんぢやもんぢやか若葉してひ  
 とつに茂る森の神垣。(衣太)  
 ●紙になる木さへこの頃若葉してすく所な  
 く生ひ茂るなり。(吉住)  
 ●いにしへの八重九重に引かへて十重はた  
 へにぞ茂るならの葉。(下吉)  
 ●照る月の都もみえじ背によしならの若葉  
 の庭に茂りて。(御風)  
 ●石やには青葉鮎やには若葉なり。(川柳)  
 ●祭日知らぬ入梅に若葉の桐丸太。(同)  
 ●瀬戸川へ背地につよる山若葉。(同)  
 ●若葉をば弟子に吹かせる風の神。(同)  
 ●ゆかりよしある初草の、若葉のうへを見  
 つるより、いとど乾かぬ袖のつゆ、なほう  
 きまさる旅寝哉。(俗語)  
 ●春老餘花瘦不<sub>レ</sub>禁。枝頭忽醒一庭陰。東  
 皇開<sub>レ</sub>畫初施<sub>レ</sub>淡。西子垂<sub>レ</sub>羅不染<sub>レ</sub>深。雨濛  
 輕烟無<sub>レ</sub>限思。月來清影可<sub>レ</sub>憐心。莫<sub>レ</sub>愁蟬

蝶相親少。自有黃鸝送好音。(馮時可)  
●雨霽園林綠陸離。窓前無樹駐春姿。忽逢狂蝶來深入。應有餘芳未盡枝。

(茶山)

●睡足高橋春日斜。碾聲初破小龍茶。樹邊綠樹飛紅盡。春色墮陰老薺花。

(張耒)

●綠葉裁三刷翠。紅英動日華。

(元稹)

●曉晴千樹綠。新雨半池澗。

(徐夔)

●新絲滿園遺可人。

(張翥)

●千林嫩葉始離鶯。

(鄭棖)

●碧葉風來自有情。

(白居易)

●新葉涼陰多。

(同)

〔わかれ〕別  
別離。別恨。離歌。離思。去路。  
別淚。結愁。斷腸。折柳。牽衣。  
立わかる。あかぬ別。袖のわかれ。をくる袖。かりそめの別。雲のよそ。心をなぐへてやる。かへりこんほど。長路の末。  
●信乃はほとく困はてて、潜びながらの聲を激し、さりとては亦聞きわきなし。

命あらば時もあらん。死するが人の誠かは。たま〜伯母と伯母夫の、許を得たる出世の首途、妨せばわが妻にあらず。過世の替かと察むれば、濱路はよと泣き沈み、こゝろの願を遂げんとすれば、おん身の仇になるよしを、さとし給ふに術もなし。ともかくにも形なき、わが身ひとつの故ならば、思絶えて留り待らん。さらば道中苦なく、折から烈しき日まかせず、許我へ参りて名をもあげ、家を興して冬籠、北山風ふくころは、風の便にいらせてたべ。筑波の山のこなたには、恙もなくて君ますと、思ふのみにて侍りてん。今より弱る玉の緒の、たえなばこれをこの世のわかれ、還むはまだ見ぬ冥土のみ。二世の契は必よ。御心變らせ給ふなと、暮なき事を木綿帯、かけてぞ契る願言は、さかしく見えてもおぼこなる、未通女こゝろの哀なり。信乃もさすがにうちしなれ、慰めかねてうなづくのみ。又いふよしもなかりけり。折からつぐる八聲の難に、信乃は心をおくの問なる、二親めまされ給はん。とく〜といそがし立つれば、濱路はやうやく立ちあがり、天もあけば孤にはめなんくだかけの、まだ

きになきてせなをやりつゝ、それはこひせし草まくら、是は旅ゆく妹脊の別、難もなかつば天もあけじ、曉つけずげ人の目も覺めじ。恨めしの難のねや、よに逢坂のあふ香はあらで、ゆるさぬ関はわがうへに、在明の月ぞ果敢なきと、口ずさみつゝ、出でんとすれば、外面にはぶきして、障子をほとく〜とうち敲き、難がうたうて候ふに、いまださめ給はずやと、よびおこす聲は頼藏なり。信乃はよばれていそがはしく、いらへすれば頼藏は、扈厨のかたに退きけり。疾くこのひまにと出しやらるゝ、濱路は臉なきはらし、聞きかたより見かへれど、涙にかすむ狭山形、紙張の壁に身をよせて、おのが臥房に泣きにゆく。げに悲しきは死別より、生別にますものなし。  
(馬琴)

申すべき事候ふと聲々に申せば、何事にやとて立歸り給へば、前後左右に立ち圍みて泣くより外の事ぞなき。誠は只今をなかりにて、又逢ふべき事ならねば、餘波を惜むも理なり。入道今度老の頭に兜を戴きて、合戦を致す事、全く我身の榮花を期するにあらず。若打勝ちて運を開かば、汝等を世にあらせんと思ふためなり。今養朝を頼みて出づるも、我若安穩ならば、其陰にて各をも助けばやと思ふ故なり。汝等をすて、我一人助からんとや思ふらん。船既に致仕に餘れば、身の後榮をか期せん。如何ならん所にも、深く隠れて待つべし。疾々として下られけるが、かくて心強くは宜ひしかども、さすがなごりや惜しかりけん、又立歸りて頼賢よ、頼仲よ、いふべき事あり、附れと宣へば、各呼ばれて立ちかへる。誠には異なることなけれども、あかぬ別の悲しさに又呼び下し給ひける、恋愛の程こそあはれなれ。如此互に別を慕へども、さてあるべきにもあらざれば、面々は散々にこそ別れゆく。落つる涙に道昏れて、行先更に冥々なり。悲しき哉、人界に生をうけながら、鳥にあらねども四鳥の別を致し、あは

れなるかな、度切の契空しくして、魚にはなれども、釣魚のうらみを含む。涙雨干として魂飛揚すと見えてあはれなりし有様なり。子供は小原静原産生の里、鞍馬の奥資船の方さまへ、思ひ〜に落ちゆけば、深山がくれの秋の空、露も時雨も争ひて、我袖の涙も更に眞柴とる、山路のおくを辿りつゝ、人里遠く分け入れば、峯の巴環一度叫び、行人の裳を潤せば、谷の牡鹿の妻戀に、旅客の夢もさめぬべし。(保元物語)  
●入道その儀ならば、妓王疾く〜籠り出でよと、御使重ねて、三度までこそ立てられけれ。妓王は、もとより思ひ設けたる道なれども、さすが昨日今日とは思ひもよらず。入道相國如何にも叶まじきよし頼のたまふ間、掃き拭ひ塵拾はせ、出づべきにこそ定めけれ。一樹の蔭に宿りあひ、同じ流を掬ぶだに、別は悲しきならひぞかし。いはんや是は三年が間、住みなれし所なれば、名残もなしく悲しくて、甲斐なき涙ぞ進みける。(平家物語)

●これまでなりやいつまでも、名残は更に盡きすまじ。暇申して蟬丸、一樹の蔭の宿りとして、それだにあるにまして實に、兄の宮の御別れ、とまるを思ひやり給へ。實に痛はしや我ながら、行くは慰む方もあり、とまるをさこそ夕雲の、立ちやすらひて泣き居たり。鳴くや關路の夕鳥、浮れ心の鳥羽玉の、我黒髪の飽かで行く、別れ路とめ逢坂の、關の杉村過ぎ行けば、人聲遠くなるまゝに、藁屋の軒にたすみて、互にさらば通常には訪はせ給へと、幽に聲のする程、聞き送りかへり見おきて、泣くなく別れおはします。(謡曲、蟬丸)  
●いやとにかくに數ならぬ、身には恨もなけれども、是は船路の門出なるに、涙風も静を留め給ふかと、涙を流しゆふしでの、神かけて變らじと、ちぎりし事も定めなや、げにや別より、まさりて惜しき命かな、君に二たび逢はんとぞ思ふ行末。如何に辨慶、静に酒をすゝめ候へ。畏つて候ふ。げに〜是は御門出の、行末千代ぞと薬の盃、静にこそはすめけれ。妾は君の御別れ、やる方なきにかきくれて、涙にむせぶばかりなり。(謡曲、舟辨慶)  
●入江の田嶋も聲をしまぬ程、あはれなる折から、人目も包まず、逢ひ見まほしくは思へども、早漕ぎはなれて、行く袖の露け

さし、昔に似たる旅衣、田舎の鳥も遠ざか  
るまゝに、名残も半の車にめされて、上れ  
ば下るや舟の、舟影ほのく、と明石の浦  
わの、舟なしも思ひの別かな。

(謡曲、住吉詣)

●其文月の七日の夜、君とかはせし睦音  
の、比翼連理の首の葉も、枯々になる私語  
の、篠の一夜の契りだに、名残は思ふなら  
ひなるに、ましてや年月、馴れて程経る世  
の中に、さらぬ別れのなかりせば、千代も  
人には添ひてまし。よしそれとてものかれ  
得ぬ、會者定離ぞと聞く時は、逢ふこそ別  
れなりけれ。

(謡曲、楊貴妃)

●名残り惜しさの山々を、言はぬ心のいぢ  
らしさ、手負は今を知死期時、と、様も  
しと、様と、呼べど答へぬだんまつま、親  
子の縁も玉の緒も、切れて一生の愛き別、  
わつと泣く母、泣く娘、俱に死骸にむかひ  
ぢの、回向念佛は戀無常、出で行く足も立  
ら留り、六字の御名を祈の音に、南無阿彌  
陀佛なむあみだ、是や尺八煩悩の、枕並ぶ  
る追善供養、関の契は一夜きり、心残して  
立ち出づる。

(浄瑠璃、忠臣蔵)

しきかば今かへりこん。

(行平)

●別れても心へだつな旅衣いくへかさなる  
山ぢなりとも。

(定家)

●さりともとなほ逢ふことを頼むかなし  
の山ぢなこえぬ別は。

(西行)

●めぐりあひて見しやそれともわかぬまに  
雲がくれにし夜半の月哉。

(紫式部)

●行末の命もしらの別路はけふ逢坂や限な  
ららん。

(能宣)

●たび衣さきだつものは涙にて心もゆかね  
わかれぢのそら。

(宣長)

●露わけてけさの別の袖の上を思ひも出で  
よまのゝは原。

(枝直)

●心ゆく道にしあらねばけふ人にたちわか  
るともおもほえなくに。

(成章)

●あすしらぬ身をながれといひる哉行末  
とはき人の別。

(藤原)

●ひさとめてなほこそしたへ旅衣たちとま  
るべき別ならねば。

(成章)

●此程の花に禮いふわかれ哉。

(芭蕉)

●さむしるに錢置く花の別哉。

(凡菫)

●稻妻にはしりつきたる別かな。

(釣雪)

●あき風に申しかねたる別かな。

(野水)

●夢食ひし雁と思へど別哉。

(同)

●星合の夜は長からで別哉。

(雪窓)

●蚊のあとをみれば悲しき別哉。

(根風)

●夢の穂に唾もぬれてわかれ哉。

(也有)

●遅う暮るゝ日もけふぎりの別哉。

(杉風)

●落付の知れぬ別や風巾。

(丈草)

●近村になりて別るゝ案山子哉。

(惟然)

●朝な夕な窓の戸隙子おのれさへたがひち  
がひに立ちぞ別るゝ。

(如竹)

●難はきつにはませかねを錢に縛りてさの  
別を思ひしらせん。

(旅雄)

●別路の袖には秋の來もせぬに扇わすれて  
又もどるなり。

(菅江)

●長半毎に立ちよる関の妻戸さへあけて左  
右へ別るゝぞうき。

(卜翁)

●春さぶみ今朝は衣を重ねこといふたが霜  
の別なるべし。

(斐馬)

●左様なら随分よめでおまめでとまめのす  
きな馬のはなむけ。

(樸翁)

●わづかでも旅と思へば長繩手あちらにも  
まつ、こちらにもまつ。

(玉丸)

●またもとへ歸りきませと子母錢にぬりし  
ちぶりの神や祈らん。

(曾根)

●きぬの別の別ををしとばかりにてことば  
づかひのはなれ難なき。

(奇紀)

●しばらくし別となればかたうでのさらる  
ゝ様に思ふ渡邊。

(関月)

●明の鐘兩方嘘のつき別れ。

(川柳)

●再會を期して大門から別れ。

(同)

●立別れ三年は役に松が岡。

(同)

●吉野山静に行けと御別れ。

(同)

●別れても逢ふ道前と義士の假名。(同)

(同)

●きぬの浅黄しく禮して別れ。(同)

(同)

●予うらゝ引いて別れる三輪の神。

(同)

●月とや入るやれノウ山のはに、離れく  
の浮雲見れば、あすの別もあゝの如く。

(俗語)

●さまよあれ見よあの雲行な、さまと別し  
わの如く。

(同)

●君にわかれて松風越せば、松のつゆやら  
涙やら。

(同)

●ひとつ枕に沈みしなかも、憂きは別の袖  
のつゆ。

(同)

●會ふは別れの始め。

(俚語)

●會者定離。

(同)

●食不食梅難。榮能苦兮梅能酸。  
未如生別之為難。苦在心兮酸在肝。晨  
雞再鳴殘月沒。征馬連嘶行人出。回看骨肉

(李順)

哭一聲。梅酸苦甘如蜜。黃河水白黃雲  
秋。行人河邊相對愁。天寒野曠何處宿。棠  
梨葉戰風勢々。生離別生離別。憂從中來  
無斷絕。憂極心勞血氣衰。未年三十一生  
白髮。

(白居易)

●高館張燈酒復清。夜鐘殘月雁歸聲。只  
言啼鳥堪求後。無那春風欲送行。黃河  
曲裏沙爲岸。白馬津邊柳向城。莫怨他  
鄉暫離別。知君到處有逢迎。

(張謂)

●青山橫北郭。白水遶東城。北地一爲別。  
孤蓬萬里征。浮雲游子意。落日故人情。揮  
手自茲去。蕭蕭班馬鳴。

(李白)

●故人西辭黃鶴樓。烟花三月下揚州。孤  
帆遠影碧空盡。惟見長江天際流。

(同)

●下馬飲君酒。問君何所之。君言不得  
意。歸臥南山陲。但去莫復問。白雲無盡  
時。

(王維)

●欲別牽郎衣。郎今到何處。不恨歸來  
遲。莫向臨邛去。

(孟郊)

●君去春山誰共遊。鳥啼花落水空流。如今  
送別臨溪水。他日相思來水頭。

(劉商)

●陰雲帶殘日。恨別此何時。欲望黃山  
道。無由見所思。

(李順)

●此地別燕丹。壯士髮衝冠。昔時人已沒。

(李順)

今日水猶寒。(踏實王)

●前途程遠。馳思於雁山之暮雲。後會期遙。  
露灑於鴻臚之曉淚。

(後江有公)

●昔乘舟鳥。籠寸陰於十五年間。今促晷  
熊。欲分手於三百盃之後。

(順)

●楊岐路滑。我之送人多年。李門波高。人  
之送我何日。

(以言)

●欲以浮世期後會。還悲石火向風敲。

(晉公)

●風蕭々兮易水寒。壯士一去兮不復還。

(荆軻)

「わたし」渡

渡頭。渡船。渡口。渡河。徒涉。

野渡。岸頭。柳陰。喚船。

わたせ。かちわたたり。舟をまつ。

わたしぶね。わたし守。ふるさ  
わたし。わたせひまなき。

●わたし舟のあまたある道な。ゆくとのあ  
りしに。堤のこなたになれば。かち人舟に  
おくれじと足をそらなり。おのれはことさ  
らにもいそがでわたれば。舟むかひにあり  
て。いそぎたるものこなたにまつ。やう

くにして舟いたればおのれとひとしくのりてわたる。また川あり。いそぐ人はじめのごとく、おのれいたればみな人川のなかにのり出せり。おのれはおくれたり。いまひとつの川にては、人こなたにまつことはじめのごとく、おのれとひとしくのりて行くかたに時を同じうす。舟のこなたにいたらんとするを、見つけていそがはんはさもあるべし。堤をへだて、たれかよく、これをはからん。さればかれのいそぎて、得る所ひとつ失ふところ二つなり。よし五を得て、いつうをうしなふとし、いそぐにあやまつところ中なり。世をわたる人これにちかし。いそがざるもの、大やうはおこたりぬ。たゞゆくおしをつとめて、ゆく道をゆくべし。

●猶ゆきく武蔵の國と下總の國との中に、いと大きな河あり。それを隅田川といふ。其河のほとりにむれぬて、思ひやれば、かぎりなく遠くも來にけるかなとわびあへるに、渡守はや船にのれ、日もくれぬといふに、のりて渡らんとするに、皆人物住して、京に思ふ人なきにしもあらず。さる折しも白き鳥の、嘴と足と赤き、鳴の

大ききなる、水の上遊びつゝ、魚をくふ。京には見えぬ鳥なれば、皆人知らず。渡守にとひたれば、これなん都鳥といふをきき、名にしおはよい言問はん都鳥我思ふ人はありやなしやと、とよめりければ、舟こぞりてなきにけり。

●十月二十三日の暮程に、矢口の波に下り居て、渡の船をまち居たるに、兵衛佐殿を渡し奉りし時、江戸が語らひを得て、のみをぬきて船を沈めたりし渡守が、江戸が恩賞賜りて下ると聞きて、種々の酒肴を用意して、迎の船をぞ清き出しける。此船已に河中を過ぎける時、俄に天かきくもりて、雷鳴り水烈しく吹き漲りて、白波船を漂はす。渡守周章騒ぎて、清き戻さんと櫂を押して船を直しけるが、逆まく浪に打返されて、水手棍取一人も残らず皆水底に沈みけり。

●卯月のつごもりに長谷寺に詣つて、淀のわたりといふものをせしかば、船に與をかきすみて行くに、さうぶ菰などの未短く見えしを取らせれば、いと長かりけり。

●船待ち得たる旅の暮。かゝるをりに近江の海の、矢橋を渡る船ならば、それは旅人の渡舟なり。是は又、浮世を渡る柴舟のほされぬ袖も水馴棒の、見馴れぬ人なれど、法の人にてましませば、船をばいかで惜しむべき。とくく召され候へ。

●そもや舟にて見見えしとは、矢橋の浦の渡守の、其船人こそ兼平が、現に見見えし姿なれ。さればこそ始より、やうある人と見えつるが、扱は昨日の舟人は舟人にもあらず、漁夫にてもあらぬ武士の、矢橋の浦の渡守と、見えしは我ぞかし。同じくは此舟を、御法の舟に引かへて、我を又彼岸に、渡してたばせ給へや。

●舟長待ち受け何故女中の亂れ姿、思ひありてかいたはしや、向へ渡る人ならば自ら越してまゐらせん。疾々舟に召さるべし。なう同じ世に同じ人乍ら變るは心々ぞや。爰より下の渡舟我をも乗せてと頼みしに、心強き船頭にて、和女は都詞、狂女と見え

し、面白う狂うて見せずば、舟に乗せじと有りし故、うたてやな隅田川の渡守ならば日も早暮れぬ。舟に乗れとは昔ひしめて、舟に乗るなと仰せあるは名にも似ず。チ、野暮らしと一ぼんさせて参りしぞや。夫には引代へ疾く舟に乗れ渡さうとは、殊勝やお嬉しや。亂れ心も思ひ子の、生きてあるとも死んだとも、行衛有所の知れの故、遂はよ何しに狂ふべき。船こぞりて狭くとも乗せさせ給へ渡守、お慈悲ぞや乗せたび給へ。

●色も嫉妬に迷ひの烟、暗む眼に涙の雨はら／＼はつと霧を蹴放し砂を飛ばし、駈け行く道も心柄、果して涙の音凄き、日高川の渡場に、漸く辿り着きけるが、早月代も指登り、隈無く見ゆる向ふの岸、小舟もやひて舟長が、笠傾けて眠り居る。

●から人のこすあさ川を流るべにて世わたる道もこゝろ瀬にせん。  
●さしわたす小舟よぶなを祭ばかりのこゝりてくるゝ淀の川づら。  
●行きかよふ舟路はあれどしかすがのわたりはこゝろなくこゝろありけれ。

●いづかたによりてわたらんあかすがのたむけの神にまづやつげまし。

●むらさめにうすくもかけて行く舟の、かのわたりの夕ぐれのそら。

●こゝろそのつしまのわたり浪あらしいかにかちと心ゆるすな。

●わがこひはかの渡のつなでなはたゆたふ心やむ時もし。

●夕ぐれにすだのわたりは見えぬともふな人よばふ聲きこゆなり。

●夜を深み呼ぶに答へてわたり守猶ねぶらん根の音しせぬ。

●山陰をいづる川瀬のわたし舟なればよりこそ月に見えなれ。

●拵ふておれは水雞やわたし守。

●萬歳を帆にして早し渡舟。

●女見る春も名残や渡守。

●梅折に舟よぶ多摩の渡哉。

●草枯れて渡は橋に成りにけり。

●渡し呼ぶ草のあなたの扇かな。

●鶯のきこゆる戸田の渡哉。

●雉子鳴くや春をかぎりの舟渡。

●菜の花や小屋より出づる渡守。

●十六夜や一艘くらきわたし舟。

●野遊の落ち合うて乗る渡哉。

●鳥雲に入る大越の渡哉。

●瓜ならば奈真づけにせん渡場の狗にめせとて呼べる一舟。

●板一枚下の地獄も錢次第蓮古越にする大井川。

●渡には汐かげんよき青龍のまつま芋をもむし上の世と。

●詠めやる弓手はつくば馬手は富士三國一の隅田の渡場。

●比叡おろし吹く日も命的にして矢走を渡る嶋の浦人。

●すれちがふ渡の舟の川風に吹ちらしたるさきのこと傳。

●まだくちね橋も有りやとうたがはんながらに渡す葎一筋。

●うつそばのこがのわたりのもやひ綱つなぐまもなく出するなり。

●あひ將葉まけすかつらの川舟はむかふ前からさして行くなり。

●十里ひく淀の渡のふねのうち三里をすゐる旅ぞいそがし。

●川水も高くぞ花の雪解していざ渡る瀬も

- すだの白渡。(敏住)
- ぶらつきな棒で抱いた渡守。(川柳)
- 渡守一棒戻す知つた人。(同)
- あれなるは鶴で候と渡守。(同)
- ころなく月に棒さす渡守。(同)
- 渡守今はさくらのものがたり。(同)
- 渡守毎口一つ所をさぎ。(同)
- 引下つて来るをにこく渡守。(同)
- 二十五と四十二で込む渡守。(同)
- 行水のなりにはこがね渡守。(同)
- 渡しよぶ聲にこたく女づれ。(同)
- 吉野よく見し人はいさ、花は昔妻の隅田川、世に似ぬ春の光ぞや。都鳥にこくとひし、昔には似ず渡し守、春はひまなくみなれ棹。(俗語)
- わたりくらべて世の中見れば、阿波の鳴門に波もなし。(同)
- 渡りに船。(俚語)
- 行人呼ぶ渡去。舟子如く充耳。寸歩有不及。放箭已離深。舟子與行人。齊爭在寸替。運速有矢數。世事總如此。且共班荆魚。坐看暮山紫。(山陽)
- 認得津渡海。寧然到岸遲。秋河忘我相飲。水勝三人知。火宅燒干地。蓮花笑一

杖。悟來須自渡。師只渡迷時。(張船山)  
 ●別駕亡來萬事非。夕陽官渡客行稀。貧家新婦應惆悵。勝與陳王詠感妃。(王漁洋)  
 ●是誰寫出兩兼風。宛見當年孤客蹤。渡口喚舟舟未到。黑雲中望大天龍。(竹外)  
 ●西連雙浦走中原。風色蕭々野渡昏。一望孤城天接水。亂山合處是彭門。(同)  
 ●孤村搖蕩酒旗風。野岸人家翠柳中。略似江南渡傍渡。一灣春水晚霞紅。(沈德潛)  
 ●獨憐幽草洲邊生。上有黃鸝深樹鳴。春潮帶雨晚來急。野渡無人舟自橫。(韋應物)

も、いと人々しきをよびよせて、何しにかよるものにはつかはるゝぞ、いかゞ覺ゆるなど笑ふ。物いとよくするあたりにて、下製の色、うへのきぬなども、人よりはよく着たるを、これは他人に着せばやなどいふに、實にぞ詞遣などのあやしき。里に宿直ものとりやるに、男二人まかれといふに、一人して取りにまかりなんものなといふに、あやまの男や、一人して二人のものなば、いかでもつべきぞ。一升瓶に、二升は入るやといふを、なでう事と知る人はなけれど、いみじう笑ふ。人の使のきて、御返事疾くといふを、あなにくの男や、籠に豆やくべたる。この殿上の墨筆は、何者の盗みかくしたるぞ。飯酒ならばこそ、ほしうして人の盗まめといふを、又わらふ。女院なやませ給ふとて、御使にまゐりて歸りたるに、院の殿上人は誰々かありつると人のとへば、それかれなど四五人ばかりいふに、又はと問へば、さてはいゆる人どもぞありつるといふを、また笑ふも、又あやしき事にこそはあらめ。人間に寄りきて、わが君こそまづ物きこえん。まづ一人ののたまへる事ぞといへば何事にかとて、几帳

「わらひ」笑

惘笑。嘲笑。大笑。三笑。談笑。諂笑。微笑。哄笑。  
 ぼくぼく。ぶひ。ぶらぐ。ぶくぼ。ぶがほ。ぶみさかゆ。ぶみかたま。

のもとによりたれば、體籠により給へといふを、五たいごめにとないひつるといひて、またわらふ。除目の中の夜指油するに、燈籠のうちしきをふみて立てるに、新しき油車なれば、つようとらへられにけり。さし歩みてかへれば、やがて燈籠はたふれぬ。腹はうちしきにつきてゆくに、實に道こそ驚動したりしか。頭つき給はぬ程は、殿上の齋盤に人もつかず。それに方弘は、豆一盛をとりに、小降子のうしろにて、やをら食ひければ、ひきあらはして笑はるゝことぞかぎりなきや。(清少納言)  
 ●去年より新しう通ふ聲の君などの、内裏へ参るほどを、ころもとなく、處につけて、我はと思ひたる女房ののぞき、奥のかたにたすまふを、前に居たる人は心得て笑ふを、あなかまくと招きかくれど、君見知らずがほにて、おほどかに居給へり。此處なる物とり侍らんなどいひ寄り、はしりうちて逃ぐれば、あるかぎり笑ふ。男君もにくからず、愛敬つきて笑みたる。ことに驚かず顔少し赤みてゐたるもかし。(同)

しける。そのゆへは、まめだらたる人には物いひにくし、ちちとけたる気色につきてなん、人はものはいひよき。されば大小の事聞かんが爲なりとぞおほせ事ありける。それさることなり。けにくき顔には物いひふれにくきものなり。(爲業)  
 ●手をつくりて顔にあて、見奉りあげたるしを、こがましげなる殿の男まで、おのが顔のならんさまをばしらで、ぶみさかえたり。(紫式部)  
 ●如何にあれなる童部どもは何を笑ふぞ。何我妻の逆さまなるがなかしいとや。實にくさかさまなる事はなかしいとや。扱は我妻よりも我等が身にて、我を笑ふこそ逆さまなれ。おもしろし。(論曲、蟬丸)  
 ●常世が常に着りたる、馬武具や打物の、物其の物にあらざる気色、さぞ笑ふらんさりながら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりはいさめども、勇みかねたる渡馬の、あら道おそや。(論曲、鉢木)  
 ●兵衛涙拭拭ひ、扱々二人を取りかへ預つた其夜より、今日迄の心苦しき、笑ひといふもの頓と忘れた。伊賀殿もさぞあらん、心掛の子供は落す、斯様に覺悟極めたる今

の心安き、六波羅殿への出仕は直に六道の門出、いざ悦びに一笑笑ふまいか。それ善かるう興も笑やれ。イヤ推参者、何吹ゆる事が有る。夫の調背くかと、睨み付けられ叱られて、涙一所にハ……ハ……虎溪の三笑と名に高き居士の大笑は、夫も三人是も三人、劣りはせぬと打笑ふ。(淨瑠璃、新編雪物語)  
 ●主君の敵の師直に母の仇妻の仇、三つの恨を一太刀に、晴さんと思ふ門出は嬉しうないか。嬉しうござる。足が軽いと進むにも、流石恩愛骨肉の、變れる形に氣怱れして、父には包む力綱が涙、父は我子を勇めの笑、泣くも笑ふも武士の道、哀にも又頼母し。(浄瑠璃、悲盤太平記)  
 ●春くれど野への霞につままれて花のよまひのくちびるも見ず。(仲實)  
 ●おもはぬに妹がよまひをゆめに見て心の中にもえつゝぞなる。(萬葉)  
 ●なでしこの花見ることにとめらがよまひのほひおもほゆるかも。(同)  
 ●何事を思ひけりともしられじなふみのうちにも双やはなき。(家真)  
 ●春風に吹き出し笑ふ花もがな。(芭蕉)

- 狗背の塵にふるるゝわらひかな。(風雲)
- 豆を打つ聲の中なる笑哉。(其角)
- はつ蝶を兒の見出す笑かな。(柳風)
- 折火客笑ふなこれに炭の糞。(藝太)
- 柘成が蒲團引はぐ笑哉。(一茶)
- 月見舟樽纏きれたる笑哉。(雨色)
- 月今宵めくら突當り笑ひけり。(蕉村)
- 笑はれに行かばや花に老の歌。(杉風)
- 被句して笑はれにけり今日の月。(丈草)
- 引取りて蒲團ぞ寒き笑ひ聲。(惟然)
- 初聲まてしあひの高笑ひはらなをかゝゆる程はくはれず。(常石)
- 降る雨をふらぬと思ふ耳つづれば花の指にし笑はれやせん。(文磨)
- 山々のあまり笑に堪へかれて春は霞の腰帯やせし。(古の休)
- 年のよる春をめでたいと祝ふおろかな山もわらふか。(めし盛)
- 花の雲天狗櫻とわらはれて空からどつと笑ふ山風。(明輔)
- 小春にも山の笑ふとうたがはん吹き出す風に落葉から。(世樂多)
- うけに入る数は七とせ何事も笑うてくらせふふふふふ。(赤良)

- 伯母さまが来たときも笑ひ顔御馳走ぶりに雪をはく梅。(帆尾)
- 朝顔の花の苔の笑ふまで今宵の月とらみくらせん。(下長)
- しるしらぬ人を狂歌に笑はせしその返報にないてたまはれ。(海音)
- 御かくごはよしかと笑ふそりならひ。(川柳)
- 女客物申などわらひごと。(同)
- かゝり人とつとわらひしかられる。(同)
- あいさつにむだならひの有る女。(同)
- けら〜と笑ふ娘は成佛し。(同)
- 挽うすのうたを見世から笑に來。(同)
- 商人の道にかしこむわらひやう。(同)
- 狼のくそ火にくべて笑はせる。(同)
- 禁足をわすれて笑ふ橋むかう。(同)
- 汝等は何を笑ふと隠居の尻。(同)
- 萬歳を下女ありつたけ笑ふなり。(同)
- 芙蓉花おとるへて、露の玉ひかりなし。今は見えじな見えせば、うとき人にはわらはれん。(俗語)
- ものいはでなかね盛を笑うてか、真に心

- も間の夜、草に宿かる露の身を、散らす嵐の戀しらす。(同)
- 笑ふ門には福來る。(同)
- 笑の中にも劍あり。(同)
- 來年の事を言ふと鬼が笑ふ。(同)
- 怒れる拳笑顔にあたらす。(同)
- すねもの、苦笑ひ。(同)
- 余嘗與二三友人、飲酒而樂、哄然而笑。又旬餘相謂曰、前日之笑、可復尋乎。遂以笑相命、會曰笑會。社曰笑社。或問而笑曰、社之有、名必有義也。以笑名社、不亦太淺易耶。余笑而答曰、予所以爲、易、吾所以爲、難也。唐人詩曰、人生難遇開口笑、又曰、一月主人笑幾回。相逢相值且銜杯、夫使笑而易事也。則何謂之難。而風指數之於三句間哉。蓋會心之友難獲、適意之事難有、二者合矣、可以一笑矣、而不會於其時、笑終不可成矣。笑其不難哉。電曰天笑。颯曰海笑。以天與海之冥漠、猶有時而笑矣。春山如笑、是山亦有時而笑矣。人其可無笑也。人亦有不幸欲笑不得者、衛君以三嘆一笑爲大敵。是終其身而笑幾回焉。奚啻一月哉。故位愈高則笑愈難。吾

情小人猶幸未離於笑也。故以我之得、笑、笑彼之不得、笑、猶之斥鴳笑大鵬、邪。各安其分、各樂其樂、而笑其可、笑、是我覺之笑也。苟不可笑而笑、存、眉語、笑。病於夏畦、將以求分外之樂、不爲鬼神所笑者幾希。則謂之辱我笑矣。我社之相、置於笑、其義如此。予乃易而笑之。吾笑于之、吾笑也。或笑而去。終吾其語、示社中之士、且誠而約之曰、我覺之笑、不可不自重也。夫陶隱居士也、惠遠山僧也、一回之笑、其聲乃聞數千載、不肯虛濕之喧嘩、是無他、可笑之友、而有可笑之事、焉。陳同甫開陳橋之變、則大笑擊、是則南會可笑之時也。我二三友人同生於離喪之世、唯笑之謀、誰知得此笑之難哉。然則相逢相值、雖然銜杯。酒不必醉、肴不必肥、絲竹管絃不必資、笑也。夫巧笑之倩、歌以侑、人誰不樂、而或以一咲傾家國、非資我覺之笑者、也。如我覺、則所謂、齋求梅花笑、可耳。而一回之笑宜、必有詩以紀其笑、勿使梅花笑我、我亦笑曰、諧。是爲笑社記。(山陽)

翁送客水邊行。沙灘馬蹄鳥帽點。昂頭問客幾時歸。客道秋風落葉飛。繫馬綠楊開口笑。傍山依約見斜暉。(蘇東坡)

● 境緣心妄起。心悟境自忘。三老同一笑。物我兩茫茫。月照清溪水。風散白蓮香。無端一笑已。千古笑何長。(真琦)

● 一月主人笑幾回。相逢相值且銜杯。眼看春色如流水。今日殘花昨日開。(唐憲童)

● 人上壽百歲。中壽八十。下壽六十。除病痛瘦死喪憂患。其開口而笑者。一月之中。不過四五而已矣。(莊子)

● 終風且暴。願我則笑。雖浪笑傲。中心是悼。(詩經)

● 回頭一笑百媚生。六宮粉黛無顏色。(杜甫)

● 下士聞道大笑之。不笑不足以為道。(老子)

● 美人一笑千金。李白

● 一笑過顏顏盡春。(星塵)

のちり。下もえいそぐ。陰野のわらび。道のたよりに折る。散りく花の下。家づとにをる。

● この頃の日の長きには、誦經も怠るとはなけれど、たゆみがちにていたうくしにたれば、との方に立出て、纏あまたきたるを、いたくなわびそなど、獨ちちつ見ありく。かたはらの岩のほとりに、なまめける女のちひさきこもて、はしたなきやうにて立ちわたるが、やよくとよびかけつ、おのれは今日此山もとに厥をりに來りて、あさりしに、はては物うくて、あくがれありきつ、おもほえず、かく深くきにけり。かへさの道教へたまへといふをよく見れば、まだかしらおるさよりし時、逢見たりしに似たり。女もいたく打驚きながら、

思ひきやかゝる山路に迷ひきて昔に似たる花を見んとは。

と忍びやかにいひたり。(尙文)

● 歸るさには、折につけつ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、厥を折り、木の實を拾ひて、かつは佛にたてまつり、かつは家づとに



●春は戯をなりのぞめる飢をさふ。伯夷が賢にあらざれば人もがめず。秋は葉を拾ひて貧き病をいやす。美人が染しいまだ肌をたるをば治せず。(光行)

●若みやや春山の草一たび焼けば、後に生ふ戯必茂し。されば祝融心ありて、これより句を多からしめむとて、初草を焼くものならん。(也有)

●下標胸くゆる、火取の灰をうちかけられ、ねたやな標の三道、梅が紅梅巻々の、句ふもかなるも分さかぬ。身を宇治山や霜雪の茂木の下根春さむみ、萌え出で兼ねる早戯の、手をみせぬ事悲しき。(諸曲、恭)

●いかに大納言の局、後の山に上り梯を摘み候ふべし。わらはも御供申し妻木わらびを折り、供御にそなへ申し候ふべし。(諸曲、大原行幸)

●されば瀬川の水にて耳を洗ひ、首陽山に戯を折りし賢人も、勅命をばそむかず。(諸曲、内府)

●三度諷めて容れられれば、身を退くは君子の道、首陽の戯に世を度ぎ、酒濱に釣なれば、鎌倉計りに日は照るまい。御殿へ向うて戯外すな。ヤレ待て〜と引き留むる。秩父は伯夷が仁を説き、和田は四皓の義を守る。(淨瑠璃、鎌倉三代記)

●野路の畔道そろ〜と、戯が襪に手を入れて、裾ひるがへす裏模様、とめ木に草も芳ばしき、春の野面に群る蝶、袖にとまらば、羽折りて鏡絶せしけはひせん。妾に我名をかりやの里、今苗代の時を得て、民の手業も遠日には、いとめづらかに引鶴の内。(浄瑠璃、菅原傳授)

●さわらびを手ごとりに折りてかへる哉我、そかねて野べはやきしか。(隆信)

●さわらびも萌えやしぬらん山人の野やく煙はたな引きにけり。(小辨)

●さわらびやもえ出でぬらん春の野に焼原あさる人しげく見ゆ。(相模)

●戯生ふるやたの戯野に打むれて折りくらしつゝかへるまこと。(好忠)

●袖つれてあそぶ春野の手すまびにありあはれなるエツ戯哉。(春海)

●おもふ人住むとはなしにさわらびのなりなつかしきみやまへの里。(長流)

●かげるふは空にさゆるを春雨にもえまされるはのべのさ戯。(契沖)

●いざげふはなぎのやけ原かさわけて手折りてをこん春の早戯。(貞淵)

●都人とはずば春もつれ〜とひとりやらんみねのさわらび。(藤庵)

●あしびきの山のさわらびもえざらば朝露わけし袖はかわかじ。(枝直)

●早戯の筮美しや指の跡。(支考)

●狗脊の塵にゑらるゝ戯かな。(風雲)

●戯野やいざ物袋かん枯れ脚踏。(蘇村)

●獨活分家路もわかれ哉。(道彦)

●山里や早戯なども垣根草。(文角)

●野の河や戯さはしてひたしもの。(召波)

●貰うた手に戯折りては持たせける。(嘯台)

●山守は未見ぬといふ戯かな。(葛王)

●めぐる口や指の染むまで戯析。(白雄)

●春の花に手ならふ戯かな。(太紙)

●土を出て市に二寸の戯かな。(九童)

●やがてまた人の手にてぞなはれなんおのがこぶしを出す早戯。(猶影)

●蹄る雁棹となりゆく春の野に手をかきにして生ふる早戯。(圓頓)

●早戯のやはらかな手をとるとも見顔

なせよ春の山守。(則次)

●げんべきのほる野にいざや出しぬらん孫の手なりに見ゆる早戯。(夢二)

●野遊びや握りこぶしもけん酒のない所にしあるは早戯。(香保留)

●春の野に指を折りたる早戯は五風十雨の口をや敷へん。(嘉和種)

●吸物の外にわらびの手から手へ皆とり膳の春の野遊。(駒丸)

●早戯のしゆる手毎に去年降りし雪を掴める春の寒けき。(行成)

●すみれさくゆかりの色の隣あひ手を出したがるはるのさ戯。(妙約)

●戯かり夕日の霞しむらさきのちりがつしりておしい山づと。(仲成)

●早戯もまた光陰のにぎりつめ。(川柳)

●片いちな事だとわらび取がいはひ。(同)

●春寒し山のわらびもふところ手。(同)

●にまり尻のやうに早戯草を分け。(同)

●やせこけた死がいと戯と。(同)

●理に伏して伯夷戯の根も掘らず。(同)

●兄弟が伸をする手も山わらび。(同)

●廣き野を小鍋に足らぬ早戯。(同)

●戯折きたる君子を見付出し。(同)

●戯の中に意地のある塚二つ。(同)

●兄弟の夜食早戯喰ひ足らず。(同)

●早戯の手に糸遊を掛ければし。(同)

●いなり山松露の玉に鍵わらび。(同)

●山や野に背い手を出す初わらび。(同)

●花やかなりし身なれども、おとろへぬれば朝がほの、口がけまつまのありさまに、たいつとなき我心、ものうき野邊の早戯の、しえいでそめしおしひのつゆ。(俗語)

●峰におふる早戯昔の花のおもかけ、わすれがたみに摘みおきて、まなき宿におくらん。(同)

●しんしのうきは戯一手。(俗語)

●皇天養、民山有戯。戯根有粉民争掘。朝掘暮掘山欲崩。致死豈知筋力竭。明朝重撥向溪流。湿被冷去泥土。夫香婦澁呼兒炊。饑腹難充不勝苦。案陰諸公知不知。朝夕思餐醜與肥。賑饑無策未足怪。胡忽剽我民膏脂。嗟予忝爲斯邑宰。致民多饑類生。但願皇天憐爾苦。五日一風十日雨。兩順風調五穀登。戲根滿山長不取。(黃裳)

●落日溪千人打戯。千箇萬箇碎筋骨。待

●唯只恐下手遲。戲隨空谷傳聲疾。破盡青山幾片雲。淘殘秋水一兩月。寄語兒童莫啼饑。澄來戲粉白於雪。忙々擊取入筐歸。不飽朝餐心轉明。安得普天大有年。鼓腹高歌臥下眠。四鄰田父月招飲。買醉不用青銅錢。(張惟木)

●野燒初肥紫玉圓。枯松瀑布煮春煙。偃王妙處原無骨。鉤戈生來已作拳。早韭不甘同臭味。秋草難滑帶腥涎。食糧豈爲兒曹設。弱脚寒中恐未然。(方岳)

●無風蒸龍世浪傳。猩猩能掌我無絲。只逢箭戲杯盤口。便是山林富貴天。稚子玉厨新脫錦。小兒紫臂未開拳。只嫌鑽外無珍饈。一味春蔬不直錢。(楊萬里)

●仕晚自知爲學拙。家貧人道治生疎。滿山薇蕨春風老。昨夜鄰翁有報書。(楊奐)

●夢遊彼南山。言采其戲。未見君子。憂々懷々。亦既見止。亦既覯止。我心則說。(詩經)

●采薇采薇。薇亦柔止。(同)

●山童新採蕨芽肥。(陸游)

●食蕨食蕨莫食拳。(楊萬里)

●中林春雨蕨芽肥。(元好問)

●紫芽初長粉如脂。(郭銍)

わノ部 わらび

●初平茂枝殿。  
●石叡殿芽紫。  
●紫殿生石殿。

(李白)  
(杜甫)  
(李賀)

詞藻類纂終



10111

明治四十年十月一日印刷  
明治四十年十月五日發行

詞藻類纂與付  
定價金貳圓五拾錢

不許複製

著作者

芳賀矢

發行者兼印刷者

東京市下谷區徒士町三丁目四十九番地  
合資會社 啓成社

印刷所

東京市神田區表神保町二番地  
代表人 谷川喜三郎  
弘文堂

發賣所  
發賣所

東京市下谷區徒士町三丁目四十九番地

合資會社 啓成社

大阪市東區南久寶寺町四丁目

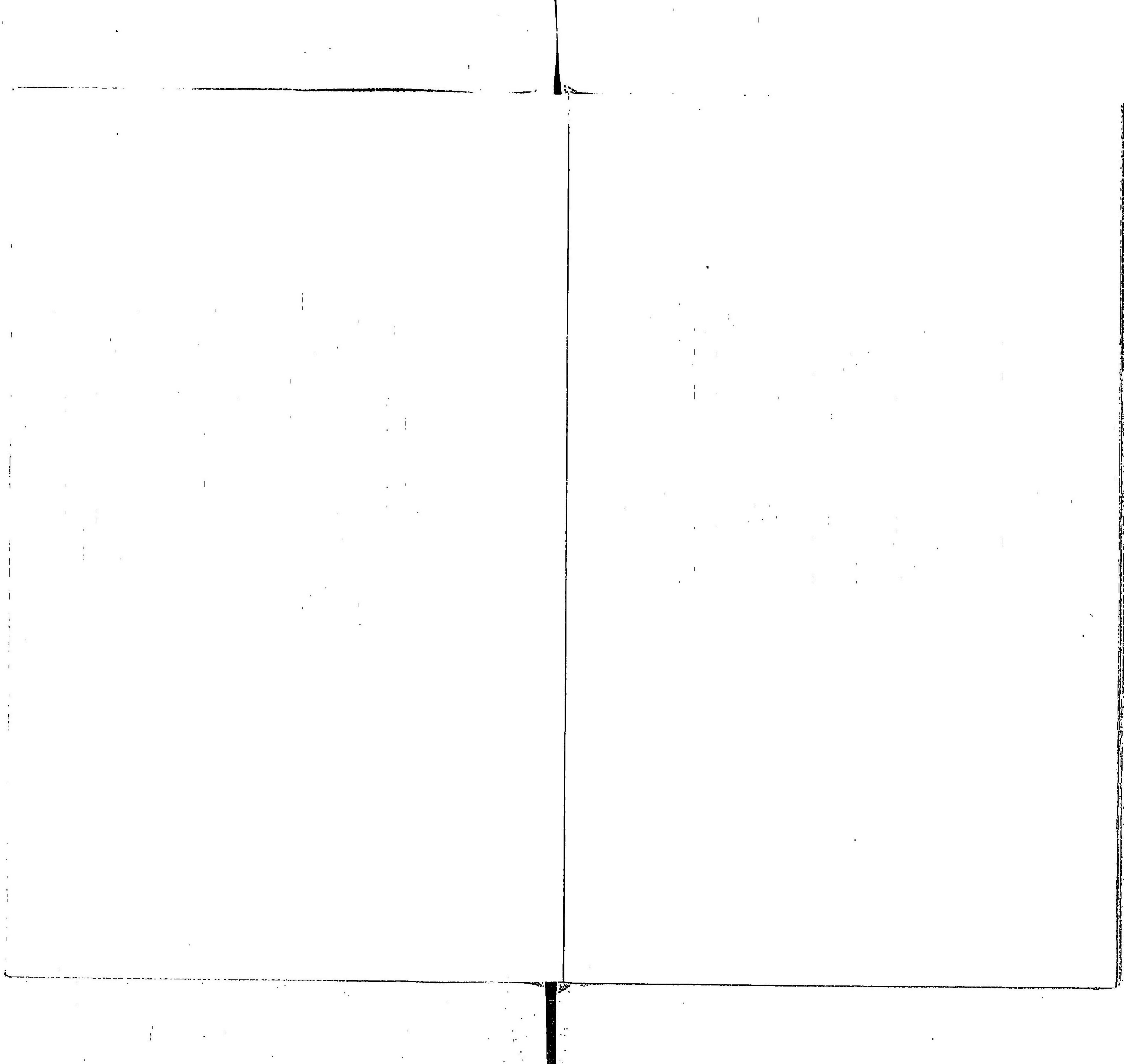
前川書店

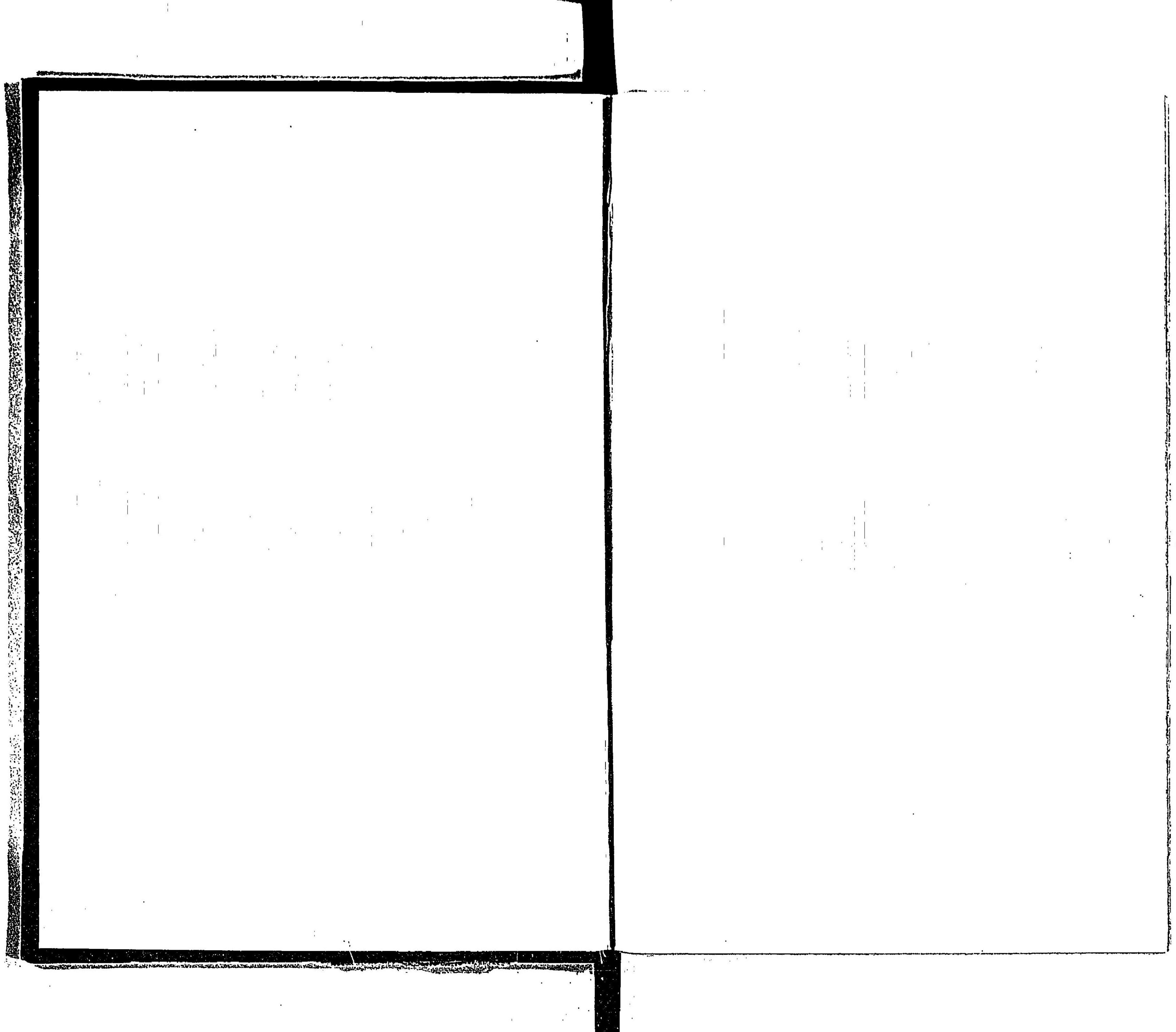
電話(長)東 七三八

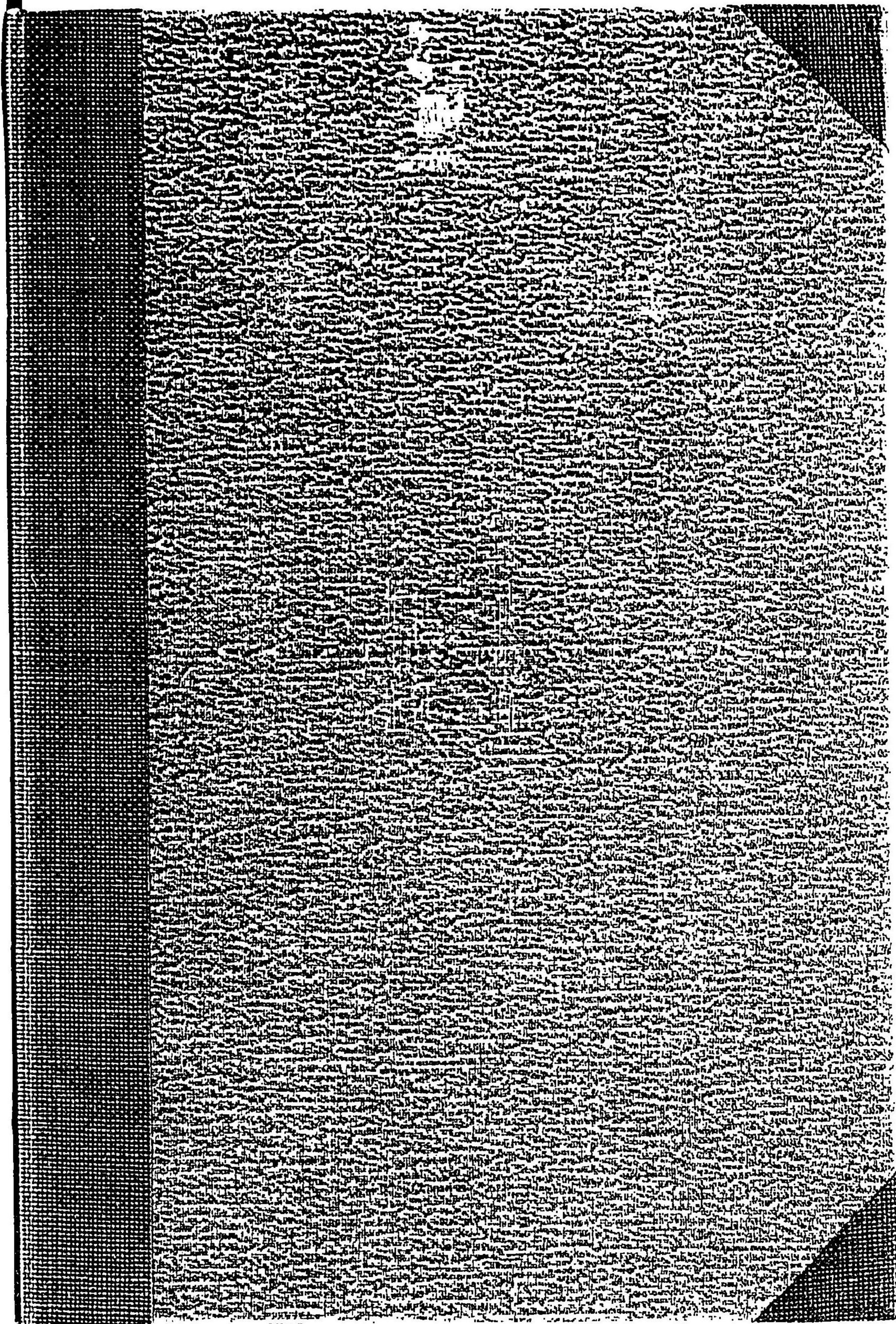
100

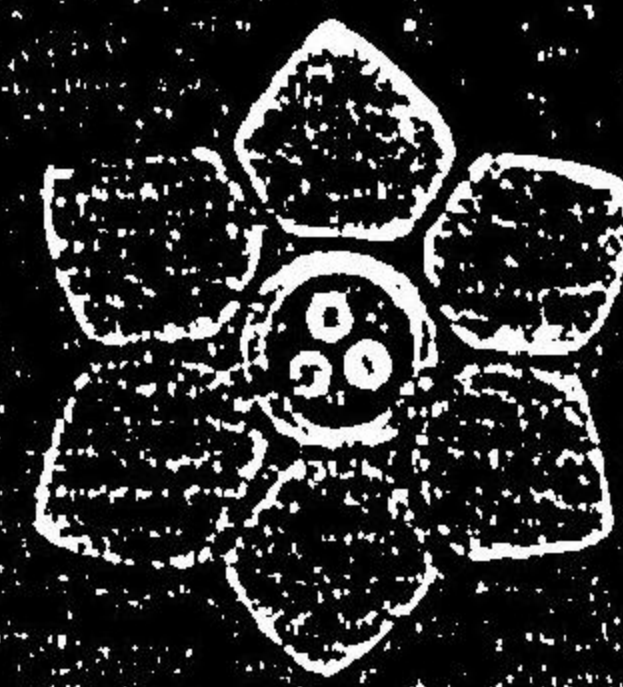
100

100









813.5
H1170

(M)

077638-000-8

813.5-H1170

詞藻類纂

芳賀 矢一/編

M40

DAC-1021

